



福島 62 便(視察研修 3 号)報告

(公開用)

1. 実 施 日

2016 年 5 月 28 日 (土) ～29 日 (日)

2. 目 的

- (1) 東日本大震災と原発事故の『風化』をさせない
- (2) 地元の現状、今を『正しく知る・伝える』
- (3) 自分達にできることを『考える』

3. 主 催

かながわ「福島応援」プロジェクト (kfop)

4. 協 力

双葉町
いわき・まごころ双葉会

5. 視察研修実施資料

福島 62 便（視察研修 3 号）＜双葉町様視察研修＞資料 20160528-29v1.2（別紙）
（双葉町の紹介、いわき・まごころ双葉会の紹介、避難状況、発災時の状況、
視察行程、参考資料、各関係）



かながわ「福島応援」プロジェクト（kfop）

目次

1. はじめに.....	3
2. 視察研修場所・時間等.....	5
3. 参加者.....	6
4. 視察記録（スタッフ記録、写真一部）.....	7
5. 視察研修記録.....	12
（補足）.....	49
1. 視察研修便参加者アンケート集計 <（）内は回収・回答数です。>.....	49
2. 会計.....	51



1. はじめに

双葉町 町長 伊澤史朗 様
総務課 総括参事 武内裕美 様
秘書広報課 係長 橋本靖治 様

いわき・まごころ双葉会 会長 岡田常雄 様
事務局長 大橋庸一 様

伊澤町長には双葉町の視察研修をさせていただきましたこと、感謝申し上げます。
そして、ご多用の中、町長にお出迎えいただき、また宿泊先でのご挨拶も頂戴し、ありがとうございました。

武内参事、橋本係長にはお休みの日にもかかわらず 2 日間ご同行とご案内いただき、ありがとうございました。夜も貴重なお話を伺うことができました。

いわき・まごころ双葉会の岡田会長、大橋事務局長、会の役員の皆様には、休日にもかかわらずお集まりいただき、お話を伺わせていただき、ありがとうございました。お話は参加者一同心にしみています。

私達が現地に赴く主旨は、

- ・現地に行って・自分の目で見て・自分の耳で聞いて・自分で体感すること
- ・そして、正しく知り、正しく伝えること

それが大事だと考えています。現地に赴いて初めて知ることは多いです。

今回の訪問はとても貴重なものと思います。

参加者一同大切にさせていただきたいと思います。

双葉町の皆様におかれましては、まだまだ困難が多いと思います。

日々ご多用な中どうぞ健康にご留意いただき、町の皆様が一丸となり、これからの築いていかれますこと祈願いたします。

ご協力いただきましたこと、感謝いたします。

誠にありがとうございました。



最後に、参加者の視察研修レポートを項番 5 に取りまとめました。

- (1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）
- (2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）
- (3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）
- (4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）
- (5) 参加して（個人全体所感、神奈川県内に向けて）
- (6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

内容は、それぞれの個人の私見、感じたことです。手を加えていません。それぞれの感じ方として受け取っていただければと思います。

また、繰り返しになりますが、皆様の復興への強い想いを全員感じました。町が一丸となり、これからを築いていかれることと思います。変わらぬ現実が続いていますが、お身体にご自愛いただき、明日へ進んでいかれますこと、祈念いたします。

この視察研修の経験は、当会の活動報告等のなかでも紹介していきたいと思います（参加者名は非公開とします）。

また、ぜひ神奈川にもお越しいただき、お話を聞かせていただきたいと強く感じました。機会、場を設けることができましたときは、どうぞよろしくお願いします。

双葉町の皆様、ご多用の中、誠にありがとうございました。
お礼申し上げます。

かながわ「福島応援」プロジェクト
代表 渡辺孝彦／広報 東尚子
参加者一同



2. 視察研修場所・時間等

(1) 2016 年 5 月 28 日（土）

07:00 横浜出発
10:25 双葉町役場 いわき事務所（町長ご挨拶）
12:20 ゲート通過（視察 1）
12:25 双葉町役場・中間彫像施設建設予定地・第一原発近辺（車中）～
12:50 双葉海浜公園（下車・弁当）
13:20 双葉町ふれあい広場
13:30 常磐道双葉復興 IC 予定地（車中）
14:00 双葉駅（下車）
14:30 高瀬スクリーニング場（視察 1 終わり）
14:53 浪江 IC
15:40 道の駅よつくら港
17:00 田人おふくろの宿 ～ 自由時間
18:00 復興計画などお話・質問（研修 1）
19:00 夕食（町長ご挨拶）
20:00 懇親会
23:00 就寝

(2) 2016 年 5 月 29 日（日）

07:30 朝食
09:30 出発
09:40 勿来地区 復興住宅予定地（視察 2）
10:00 双葉町立幼稚園・小中学校仮設校舎（視察 2 終わり）
10:35 双葉町役場 いわき事務所
11:00 いわき・ふたばまごころ会様との交流（研修 2、交流会）
（会長ご挨拶、事務局長より写真を使用してお話を伺う）
（役員の皆様と交流）
12:20 双葉町役場 いわき事務所出発
17:00 横浜着・解散



3. 参加者

(1) 参加者数

	合計	女性	男性
参加者	21 名	10 名	11 名
宿泊者	21 名	10 名	11 名

(2) 参加者年代

	30 代	40 代	50 代	60 代	70 台
年代	2 名	3 名	7 名	8 名	1 名

(3) 参加者地区

厚木市	相模原市	秦野市	葉山町	藤沢市
1 名	2 名	1 名	1 名	1 名
横浜市青葉区	横浜市旭区	横浜市神奈川区	横浜市港南区	横浜市港北区
2 名	1 名	2 名	2 名	2 名
横浜市栄区	横浜市都筑区	横浜市戸塚区		
1 名	1 名	1 名		



4. 視察記録（スタッフ記録、写真一部）

かながわ「福島応援」プロジェクト（kfop）の視察研修便で双葉町を訪れました。
2 日間にわたり双葉町の職員の方にアテンドしていただきました。

- ・土曜は双葉町内（双葉海浜公園、町民立ち寄り所、常磐道に新設される復興インター建設予定地、JR 双葉駅周辺など）
- ・日曜はいわき市内にある復興公営住宅建設予定地、幼稚園・小中学校の仮設校舎をご案内いただいたあと、いわき市内の借り上げ住宅にお住まいの方々による自治会「いわき・まごころ双葉会」の役員の皆様にお話を伺いました。

双葉町は原発事故の影響で全町避難を余儀なくされ、一時は役場機能を福島県外（埼玉県加須市）に移転していました（現在はいわき市に役場を置いています）。

警戒区域の再編後も、町の（面積/人口の）96%が帰還困難区域に区分されており、立ち入りが厳格に制限されているため、復旧さえままならない状況です（※道路をふさいでいた倒壊家屋の撤去や道路の除染は済んでおり、今回立ち寄った場所の放射線量は下がってきています）。

いわき・まごころ双葉会の方々も、避難が長引くことを覚悟し、いわき市民ではないけれども「住民」としての意識を持って交流に取り組んでおられるそうです。

苦しい現実の中で、行政職員や町民の方々がそれぞれに故郷の絆を守ろうと尽力されていることを、多くの人に知っていただきたく、淡々とお伝えするしか術がありません。

《続き：一部写真》



01 双葉町役場。業務は行われておらず、車はずっと置かれたままの状態です。すぐそばまで、中間貯蔵施設の候補地になっています。



02 東京電力福島第一原発は双葉町と大熊町にまたがって立地しており、1～4号機は大熊町、5・6号機は双葉町にあります。6号機のあたりを敷地外から見学。バス車内から撮影しています。



03 双葉海浜公園。美しい渚です。三角の建物はマリンハウスという名称で、近所の住民が3階に逃げて津波の難を逃れたそうです。



04 津波の爪痕が残ります。



05 富岡町で津波被害に遭い、現在はいわき市で仕出し弁当事業を営んでいる観陽亭さんに、今回、おにぎり弁当をお願いしました。美味しかったです。



06 双葉町民の立ち寄り所。

《続き：一部写真》



07 写真アルバムなど、拾得された思い出の品の展示も行われています（現在はコンテナではなく建物内に展示）。



08 常磐道のインターチェンジを新たに双葉町、大熊町に建設する計画があります。その双葉インターチェンジの予定地です。ここと、町の復興拠点を結ぶ幹線道路も整備される計画です。



09 手前の灌木の茂みは、水田だったところです。水田はどこもこのような状況です。評価の高い、自慢のお米が作られていたそうです。



10 双葉駅に近いメインストリート。倒壊して道路をふさいでいた建物は撤去されていますが、ほとんどの建物は手つかずのまま。



11 2階の壁（パネル）が外れています。



12 こちらは完全に壁に穴が空いています。

《続き：一部写真》



13 JR常磐線の双葉駅。再開していません。建物はまだ新しいそうです。



14 ホームと線路には草がはびこっています。



15 今回の宿は、いわき市田人町にある「田人おふくろの宿」。レストランやテニスコート、体育館もあり、利用者は多いようです。



16 あたたかみのある、きれいなお宿です。横浜市青葉区から移住された方が管理のお仕事をされていました。



17 いわき市の勿来酒井地区にある復興公営住宅の建設予定地。双葉町民が対象で、180戸という大規模なコミュニティになる予定です。診療所、仮設店舗、高齢者サポート施設なども計画に盛り込まれています。



18 双葉中学校、双葉南小学校、双葉北小学校、ふたば幼稚園が1か所に集まっている仮設校舎。生徒数は全部で35名。少人数であることを逆に活かし、ICT教育も取り入れているそうです。グラウンドがないことが課題。

《続き：一部写真》



19 双葉町役場（いわき事務所）前



20 東京電力福島第一原発 6 号機の汚水タンク



22 いわき市の勿来酒井地区にある復興公営住宅の建設予定地現場、お話し。



23 双葉中学校、双葉南小学校、双葉北小学校、ふたば幼稚園の体育館に書かれた「梅檀は双葉より芳し」



24 いわき・まごころ双葉会様のお話し



25 最後にみなさんと



5. 視察研修記録

参加者による研修レポートをまとめました。レポートの項目は次のとおりです。

- (1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）
- (2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）
- (3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）
- (4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）
- (5) 参加して（個人全体所感、神奈川県内に向けて）
- (6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

※1 参加の記録の文章は原則として原文のままとし、明らかな誤字脱字の修正を除き変更を加えていません。記録上、不適切な内容・表現があるかもしれませんが、それぞれの参加が、実際に感じたこととなります。ご理解いただけましたら幸いです。

※2 記録の参加者氏名は無記載とさせていただきます。
（内部記録としては、実名版を保持しています）

**【参加者 No.1】****(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）**

バスで通った道路上では、通行の妨げになるがれき等は撤去されていて、震災とつなみ直後の様子は伺い知れません。しかし、道路以外では、海浜公園入口道路脇の津波に遭って壊れた自動車、海浜公園の壊れた「マリンハウス双葉」、旧道沿いの壊れた家屋、双葉駅の自転車置き場のパンクした自転車等はそのまま放置されており、原発事故の影響が5年以上経っても大きく残っています。

双葉町と大熊町にまたがる中間貯蔵施設予定地の広大さは想像を絶するものです。そこに敷き詰められるフレコンバックの量を思うと、平成27年3月13日初搬入から30年後までにそれだけの量を置ける最終処分場を探し移すことが本当にできるのか、疑問に思います。

その一方で、双葉ICと町へのアクセス道路が3年後平成31年に供用開始を目指し今年秋着工予定とのこと、双葉町の復興に向けて着実に前に進んでいることが分かります。

(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）

帰還困難区域に町の新たな住環境を築くと聞き、まずは驚きました。域内の相対的に線量が低い地域とはいえ相当しっかりした除染が必要なはずですが、お話を伺ってみると、9割以上が帰還困難区域の双葉町の復興のためには、まずは、避難指示解除準備区域に復興産業拠点を整備して働ける場を作り出し、人は双葉町以外からでも通勤することを想定し、町への定住は除染を進めて避難指示の解除後と、相当苦心されて練られた長期構想であると理解しました。

また、町への住帰還がかなり先になる現実を踏まえ、今の避難生活を改善するため町外4カ所に町民が集う復興公営住宅が計画されており、町民がバラバラのままでなく地域コミュニティの復活を目指していることも分かりました。

そしてとても印象に残ったのが、これらの構想が行政の目線からだけでなく町民の意見を制度として取り込みながら具体化されている点です。先行する三陸沿岸地域の復興は、順調に進んでいるところばかりでなく行政と住民の間に齟齬をきたしているところも見受けられるので、これからも本格的な復興に向けて力を合わせて進んでほしい、と願うばかりです。

(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）

山際ではなく町中によくこれだけの広い土地があったものだと感心しました。約180世帯もの町民が集まるので、地域コミュニティ復活の大きな拠点になると思います。ただ、「いわき・まごころ双葉会」の大橋事務局長様がおっしゃっていた“地域に馴染んで充実した生活が送れること”が新たな課題になるかも知れません。

また、町立幼小中学校の仮設校舎も視察しました。第一印象は“運動場のない手狭な仮設校舎”ですが、町外で立地せざるを得ない現状では、精一杯努力されての今だと思えます。ただ、子供たちには、周りに気遣いし過ぎることなくのびのびと学んでほしい、と願うばかりです。

(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）

仮設支援ではなかったにもかかわらず、十名程の会の役員の方に町役場いわき事務所まで来て頂き、少しの時間でしたが今のお気持ちを伺うことができました。



お話しして下さった大橋事務局長様のお話の中で一番印象に残った言葉が“地域に馴染む”です。突然の避難生活を強いられ町民がバラバラになっていく中で、町民のつながりのため自治会を立ち上げたが、町外で生活せざるを得ない現実を見つめて、その地域に馴染むことも大事だ、という趣旨のお話でした。頭が下がる思いです。

(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）

町の中心部を含め町域の 9 割以上が帰還困難区域であり、この厳しい現実の今を知りたいと思って参加しました。

ほんとうに貴重な視察でした。町に帰るといふ強い意志を持ち、双葉町の現状をしっかりとらえて長期構想が練られ、かつ行政と町民が一緒になって具体化を進めていることが、とてもとても印象的でした。

住民意向調査の結果を見ると、全体の 5 割強の世帯の方々が「戻らない」、特に 20 代、30 代の世帯は約 7 割、約 6 割の世帯が「戻らない」と回答されており、これが大きな現実です。しかし、毎年行われている調査結果から、ほぼ全ての年代の世帯で、わずか数%ですが「戻りたい」と考える世帯が増えているのも事実です。行政と町民が今後とも力を合わせて復興の具体的な姿を示し続けていけば、「戻りたい」世帯が少しずつ増えていくのではないかと、そう期待したいと思いました。

(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

この度の双葉町視察研修に際し、貴重な時間を割いてご対応頂いた双葉町役場の方々、そして今のお気持ちをお話して頂いた「いわき・まごころ双葉会」の役員の方々、本当にありがとうございました。双葉町の今を見て感じる事ができ、また復興への強い意志も感じる事ができ、とても貴重な一日でした。

双葉町の復興が具体化される日のできるだけ早く来ることを、心から願っています。

【参加者 No.2】

(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）

- ・バリエードの検問で、全員の身分証確認。それも出入時にあって、これが帰宅困難区域なんだと思いました。
- ・バスから、原発 6 号機や貯水タンク等を間近で見ました。思ったほどの感慨はなくこれが原発なんだという感じでしたが、一度自分の目で見ておきたいと思っていたので良かったです。
- ・双葉海水浴場では、ポツンと残されたマリンハウスと美しい砂浜がとても印象的でした。
- ・駅周辺では、一部の倒壊した建物を除けば当時と変わらない街並みに見えますが、ここで生活されていたそれぞれの方たちの事を思うと、今後どんな姿になっていくのかと思います。
- ・今回見せていただいた範囲では、除染作業をしているところが、見られなかったように思いました。町内の 96%の帰宅困難区域、4%の避難指示解除準備区域、それと中間貯蔵施設予定地との事でこれからの難しさを感じました。

**(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）**

- ・復興公営住宅については、集会所、診療所、高齢者サポート拠点等、町民の方々の思いが盛り込まれた計画だと思いました。
- ・海岸堤防、防災林、復興記念公園、復興産業拠点のかなり具体的な構想を伺いました。駅周辺の再生は、まだ帰宅困難区域であり、今後順調に進められることを祈るばかりです。
- ・町民の帰還意向調査で、戻りたいと考えている方が、増えているとの結果に驚きました。
- ・今回お話しいただいた、総括参事様と広報係長様は役場職員であり、被災者でもあるという、両方の思いが伺えて大変良かったと思います。

(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）

- ・復興公営住宅というともっと山の中にあるのではと想像していましたが、意外に近くに住宅もあり良い立地だと思いました。
- ・ここに入居された方が、何年後か双葉町にどれだけ戻られるのか。住宅が空いてしまった時に、ここがどんな形になるか心配になりました。

(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）

- ・婦人部の方と交流させていただきました。避難生活を送ることで、新しい生活環境に慣れることの難しさ。どうしても「よそ者」になってしまう。そこで地域の団体の方たちとの交流を図ったり、七夕飾りを作ったり、いろいろな形で努力されていると伺いました。また、みんなで集まれる場所がほしいとおっしゃっておられました。

これからもお元気で活動されることを祈ります。

(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）

- ・私は今まで小高町ボランティアに参加していて、初めて国道 6 号線を通った時に道の両側のバリケードを見てこれが帰宅困難区域かと驚きました。そして一度自分の目でバリケードの中と原発を見ておきたいと思って今回の視察研修に参加しました。

今回視察した範囲では、津波被害は余り見られず、放射能の影響で手付かずになってしまった町という印象です。しかしきれいな砂浜と対照的なフレコンバックの山、これからできる中間貯蔵施設など、どんな姿になるのかと思うと町民の皆様の無念が伺われます。

- ・私が今回の視察研修で一番感じたのは、「ふるさと」って何だろう。「町」って何だろうという思いでした。私の「ふるさと」は、生まれて 6 歳まで過ごした群馬県だと思っていますが、その町には親戚もおらず余り郷愁はありません。横浜に住んで 60 数年になります。横浜は好きですが、何としても離れたくないといった思いはありません。双葉町は確かに海はきれいで山も美しい素晴らしい町だと思いますが、放射能に汚染されてしまって、フレコンバックの山をさらに沢山作っても、そこに戻ろうということに、個人的には少しの疑問を感じます。

でも、福島ボランティアを続けます。福島は復興が遅れているから、手伝ってほしいニーズがあれば続けていきたいと思います。

(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

初めに、このたび私たちの視察研修をお受けいただきました事を深く感謝いたします。特にお忙しい中を二日間も同行していただきました。総括参事様と広報係長様には厚く御礼申



申し上げます。

お蔭で行政の取り組みから被災者の思いなど、沢山のお話を伺うことができ、大変勉強になりました。私自身今回の研修をこれからどう役立てていけばよいか、まだわかりませんが、自分の目で現地を見ておきたい。という思いが達成できました。

双葉町の一日も早い復興と皆様の健康をお祈り申し上げます。

ありがとうございました。

【参加者 No.3】

(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）

あの時の双葉の町に入らせていただき、錯覚を起こした次第でした。何度も見た被害の映像がバスの窓に映っているような変な気持ちです。流れていく映像、瓦屋根が崩れ落ち、ペチャンコになった家、あ、この家は無事かと思えば、サッシが傾いている。そして、何度も見た（テレビや映画）商店街の誰もいないまっすぐな道、ダチョウか牛かとさまよっていた道、多分あれはもう何年も前のこと、そして、あれから 2 年、3 年と黙ったままの町、放り出された町、駅にはあの 3. 11 の日の新聞、ホームに咲いていた野バラ、教えていただいた梅檀の木は変わらぬ緑で街中を守っているようだ。

初めて見たのはあの標語のかかった商店街の看板、旧町役場にそのままブルーシートにくるまれて置かれている。いろいろな意見・思いがあるのだろうが、役場の方達に私達は何の言葉もかけられない。

きれいな海岸、砂浜がずっと請戸の方まで続いて、思わずわーいと声をだしてしまっただが、まだ割れたガラスがぶら下がったままのマリンハウス、町の方達は見たくないだろうな。5 年の風化と合わせ、手付かずの放り出された双葉町を思った。

(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）

96%の帰還困難区域

全国に散らばった町民の把握と役場の抱える仕事量を思うと気が遠くなることと、神経をやられてしまった役場の方、この何年をタフに闘っている役場の方達に敬意を表します。

復興への町づくり・取り組みを伺い、現在の生活をもサポートしながら、一人ひとり寄り添いながらの流れ、素晴らしいなと思いました。

私は騎西高校へ車にいっぱい物資を詰め込み、出かけたことがあります。まだ早い時期だったと思います。どんよりと無機質な校内の空気、うつろな空気感の中で、誰も目を合わせずに通り過ぎる方に申し訳ない気持ちでいっぱいになり、荷をおろして挨拶するのが精いっぱいでした。役場業務もてんやわんやだったことでしょう。そして“双葉から遠く離れて”の映画で見た皆様の高校内の暮らしと役人とのぶつかり合い、怒声！ 今日までの様々なご苦勞を思うと、復興という言葉は、町民一人ひとり、そう、果てしなく、とてつもない思いを込めたものだと、いまさらながら重さを感じました。

町立の幼稚園・小中学校は立地がいわき市勿来の小学校の近くだったからか、とても（す



みません) 閉じ込められた感じがしました。そこまでの経過を知らずに言えないことですが、子供達がいわきの子供達とともに育っていく努力は大変ですが、上手にされていることと思いますが、運動会を体育館内でやったと、そのお話を伺ってさらに胸が締め付けられる思いでした。“ジプシーの学校”の言葉には鳥肌が立ち、日本ではありえない言葉と思いました。

(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）

陽当たりの良い予定地で、ほっとした方が多いと思います。そして、平地で、高齢者の生活を一番に考えられたことも。見渡すような敷地、ああ、私あそこまで歩くのはしんどいな、やっぱり、自転車やバスがないとな、お買い物へのスーパーも近いとはいえ、やはりきびしいかなと、思いましたが。

何故か、誰でもそうでしょうが、復興という言葉には、今までの生活環境より便利であることが当然のような意味が含まれている。すぐ何軒か先のお店に行っていた方や、街中で暮らしていた方はもちろん、またそのような生活を望まれること、そして独り暮らしにこの震災でなってしまった方はこの復興住宅に期待される思いの量が違うだろうと思う。

しかし、街や役場、駅にも割合近いのではと、ほっとしました。公営住宅のまわりのいわき地元の方々との交流も始まっているお話、いろいろなケースも参考にされて、よりよい公営住宅になりますよう願います。

(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）

神奈川でお会いした時よりも、やはり、双葉の空気感の役場でとてもフランクな感じでした。やはり、仕事で忙しく、60、70代が中心になってしまうとのこと、メンバーはそれぞれ一軒ずつ家を持った方がほとんどと伺い、復興住宅に入る方は誰もいないと言われ、神奈川で暮らしている方が終の棲家を手さぐりしている状態とは全く違うのだなあと思いました。このいわきで、地元の方と折り合いをつけるべき努力をされていることに、頭が下がります。

これからの双葉会に会員、また若い会員がふえますよう。

(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）

双葉町への研修、一般の団体にご丁寧にお付き合いいただき、感謝です。

これからの帰還に向け、細やかな計画がされていることに驚きました。まだまだ、とうてい双葉町は不可能だろうと思っていた。

南相馬市と富岡町も大熊町も、何故か、実現して町が本気で復活することを想像できませんでした。いわきで、これだけの町民の方々の生活を知らされたからでしょうか、役場の活気も復興に向けて、エネルギーがある気がしました。

神奈川の自分たちに何ができるか、わかりません。どの町に対しても同じように気持ちがあります。人と人とのつながりでしょうが、負担と思われずに何を、何ができるのでしょうか。

忘れないということだけでなく、やはり同じ思いの仲間で心強く探し続けたいと強く思いました。

(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

双葉町視察研修にご丁寧な対応を頂きありがとうございました。

一般人ボランティアとして福島に関らせていただいているだけの私達に何ができるのか、何かに気づくきっかけになればとの思いで、知りたい、少しでも皆様の気持ちに近づきたい



と、恐れ多くも双葉町に入らせていただき、感謝します。

この研修に対応していただくまでの長い長い 5 年間のご苦労は、とうてい想像することは不可能です。騎西高校での町民と職員さん達との沢山のぶつかり合いなど、映画で拝見しました。ぶつかる相手は誰なのか、みんな分かっているのに、目の前の役場にしか持っていくところがないのも、皆さん納得の上のことと思います。その中で、今日のこの、ただ神奈川からの私達に少しも不愉快なことおくびにも出さず、本当に職員の方々、そして支えていらしたご家族の方々に頭が下がります。ぬくぬくと神奈川で暮らしていることが申し訳ない気持ちでいっぱいです。いわきでの悲しいお話もよく伺いましたが、最近はまだ神奈川では何もなくて、みんな落ち行いた暮らしをされていると話をすると話題にさえしなくなった気がします。いわきの中の双葉町、そして、浪江町や富岡町や大熊町、これからもまだまだ何かがあれば、それ見たことかという風潮との闘い（すみません、受容ですね）が続いていくのだろう。だから、みんなしなくてもよい緊張の生活が……。精神的に強い人の言葉では言われたくないですよ。言わないでほしい。

それぞれみんなが福島を応援したいと思っている世の中になればいいなと思います。

私達にできること、これからもずっとさせていただきたいとの思いでいっぱいになりました。

ありがとうございました。

【参加者 No.4】

(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）

未だ町の 96%が帰還困難区域となる双葉町。住民は震災の翌日、着の身着のまま住み慣れた町を追われる様に避難し、川俣町を経て埼玉アリーナそして加須市の旧騎西高校へ町役場ごと避難した事は全国的に報道された。その後、町の詳しい状況も知る事ができないまま現在に至る。

今回は、いわき市内に開設されている双葉町の役場にて、お二人の職員の方にご同行いただき双葉町へと向かう。

職員の方は気さくにお話を進めて下さり、バス車内では、浜通りで使われている方言やダルマ作りなどの話に及び、この地の伝統文化に触れる事ができた。

常磐道を経て国道 6 号線を北上、中間貯蔵施設予定地となる地点に。車窓から右手に続くその予定地を見学。16 km²と言う広大な面積を実感する。施設に収容される汚染物質の総量は 22000000Kg、フレコンバッグにして 22000000 個分と後刻伺う。既に中間貯蔵施設への本格輸送に向け試験輸送が始められているとのことだ。

ゲートから入りまもなくすとかつて町の中核機能を成していた双葉町役場が左手に見える。レンガ色の瀟洒な建物。この道のすぐ右手まで中間貯蔵施設となる事を頂いた地区により確認。そこから暫く進み第一原発 5・6 号機の建屋がある敷地へと近づく。有刺鉄線が張り巡らされたフェンスの彼方に建屋の上部が僅かに見えた。所々に建てられた放射線量

を示す旗。暮らしの至近距離に原発の施設があった事を改めて実感する。

ふたば海水浴場へ。全国なぎさ百選に選ばれるにふさわしい美しい海岸線が視界いっぱい広がる。町の方々が愛用したふたばマリンハウスは津波から近隣の人の命を救った場所でもある。この美しい渚で町の人々が再び過ごせる日は何時のことだろう。ふたば海岸周辺は今後復興記念公園ゾーンの一部として位置付け、マリンハウスでは震災をバーチャル体験する場としての計画もあるとのことだ。

海岸に隣接した位置にある双葉町ふれあい広場へ。そこには多くの思い出の品が保管展示されていた。

その場から更に内陸に広がる平地には既に嵩上げ工事が進められ、町の復興の柱となる中野地区復興産業拠点の区域であると説明を受ける。このエリアには6つのエリアには分かれた産業拠点としての機能を持つ施設が将来的に整備されるとの説明を受ける。

JR 常磐線双葉駅へ通じる双葉町のメインストリート。帰還困難区域となったため、5年を経過した現在も手付かずのまま、建物は朽ち、動植物に覆われて荒れ果ててゆく姿はあまりにも痛ましい。此处を中心に将来的に復興産業拠点との連携を考えた住居の確保としてまちなか再生ゾーンとしての計画が立てられている。

復興インターチェンジへ。途中、平地には雑草が繁茂し、かつてそこが水田だった事は地元の方以外誰も気づかない。実りの秋を迎えても、現在はこの辺りには黄金色に輝く稲穂は無くそれにとって代わり黄色のセイタカアワダチソウが一面埋め尽くすと言う。復興インターチェンジは流通の要として常磐道へのアクセスを考慮しての計画とのこと。

浪江結婚式場跡のスクリーニングハウスにて全員がスクリーニングを受ける。

(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）

〈被災の現状〉

支援対象者は現在町民の約7割を占める。

人口流出の問題。

線量の変化に伴い帰還困難区域の見直しが来春辺りにあるとのことだが、高線量区域はおそらく今後も変わらないとのこと。

〈復興まちづくり計画の推進について〉

- ・町民の生活再建と将来のまちづくりの二本立ての計画。平成29年までの町の取り組むべき施策。現在の生活を早期に改善し、生活再建を果たし町民のコミュニティを再興する事を目指す。
- ・復興まちづくりに基づく事業計画について。
- ・双葉町 町内復興拠点の基本的構想について。住環境と産業再生拠点との位置的な意味合いについて。

〈復興公営住宅計画等の進行状況について〉

- ・復興公営住宅の整備



「双葉町外拠点」はいわき市、郡山市、南相馬市、白河市に整備される。その1つとして希望の最も多いいわき市に戸数 180 戸の建設計画し、町民のコミュニティの拠点としての機能を図れる様計画されている。また、復興町民会での取り組みやコミュニティの分散を防ぎ、町民同士のきずな作りの媒体としてタブレットを導入なども試みられている。

- ・ 幼・小・中学校をいわき市南部に平成 26 年 4 月開設。
少人数教育に特化し、ICT 教育の環境整備及び英語指導教育の充実を図る。この事業により近隣からの入学希望者も出ているとのこと。将来的には 200 名の児童生徒数を目指す。
- ・ 産業への誘致に向け、二居住構想の検討。
- ・ 帰還への町民の意識は増加傾向にある。
- ・ 中間貯蔵は今後 30 年間はここへ固定。最終処分場は未だに決定していない。
- ・ 住むところの保証は決定していない
- ・ お墓の問題
- ・ 町の職員は避難者でもある。
- ・ 町としては、将来的に復興を経て何時かここに住んでみたいと思う人ができる事をねらう。

(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）

いわき市南部の復興公営住宅予定地をフェンス越しに見学する。予定地は、既に工事が着工されており、予めご用意頂いた完成予想図と照らし合わせながら見学をさせていただいた。復興を進めようとする被災各地で敷地の選定に苦労されていると言う話をよく聞くが、市街地にも近く、比較的立地条件の整った土地が確保されている様に感じた。既に地域理解や地元との交流会など様々な取り組みが始まっているとの話を伺い復興への前進が感じられた。

平成 26 年から開設されている双葉町立幼・小・中学校を見学する。校庭などはなく体育活動が十分出来ているのかが疑問に残るも、1 日も早く教育環境を整備しようとする行政の努力は感じ取れた。

(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）

震災以降、避難の様子や現在の双葉町の状況などを伺いました。静かにお話をされるいわき・まごころ双葉会の方々の言葉の端々にこれまでのご苦労と悲しみ、憤りが強く伝わってきました。原発事故により、それまでの穏やかな生活が一変し、見通しも持てぬまま長期の避難を余儀なくされ、不自由な生活を強いられる中、やっと一時帰宅する事が可能になっても自由に戻れず、「行って良し」と言う警察官の言葉が心に突き刺さる。戻った我が家はすっかり荒れ果て、身体をゆっくり伸ばして休める願いも叶わず、丹精込めて育てた植物は弱り、そして愛着のある大切な品々は取り出す事もできない。どの品も大切なもの、価値は全てと同じなはずなのに電力会社が家財の保証を認める額は単価 50 万円以上の物と限定された。お聴きしたお話はこれまでのご苦労のほんの一部かと思いますが、これでもかと辛さを味遭わされて来た双葉町の方々のお話に胸が締め付けられるようでした。あるスーパーの店頭で長時間佇む年老いた女性が。誰かを待っているご様子に仮設住宅の自治会長さんが声をお掛けすると、「ここに居たら町の人に会えるかもしれないから待ってるの」とのお返事。そのご婦人のお姿が目に見えに来て来よう。苦難に遭う時こそ、より人との繋がりを求めるものですが、福島の方々はそれすら叶わない、何重もの苦労を負わされていらっしゃるのだと言う事が今日のお話を伺う事で解りました。

**(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）**

まず始めにこの研修を企画・ご準備下さいました kfop のスタッフの皆様にご心からお礼申し上げます。

これまで、限られた情報の中で、双葉町の現在の状況を知る事が出来ませんでしたので、この機会に双葉町の状況や復興に向けた計画とそれに伴う課題などを知る事ができました。

双葉町の方々があの日を境に突然住み慣れた我が家を離れ、不安の中で避難先を転々とし、物心両面の厳しい状況の中で避難生活を送っていたことを理解し、同じ時間をこの様に辛い状況で暮らされていらっしゃる双葉町を始め福島県民の方々に対して関東で暮らす私達はこのままで居て良いのだろうかと言う思いが以前よりも強まり帰路につきました。

双葉町の復興計画とその進行状況にも触れ、その計画は双葉町の再生を目指す素晴らしい計画であり、町民の戻ろうとする思いも意識の高まりもあり、明るい未来が見えるものでした。事故なく原発の廃炉作業と貯蔵施設への収容作業が進み、そして町の再生の日が 1 日も早く来ることを祈り、この地の産業の発展と県民の方々の思いに寄り添い、私達にできることがあればお伺いしてお手伝いさせていただき事が今、私達にできる事ではないかと思っています。

(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

この度は、わたくし達のために貴重なお時間を割いていただき誠にありがとうございました。

この二日間、双葉町へ訪問させていただき、貴重なお話をたくさん伺わせていただきました。町ぐるみで避難を余儀無くされた当時のご様子やこれまでの経過、そして現在の町の様子も拝見させていただき、復興への長い道のりを実感いたしました。一方、まちづくりのための復興計画についてお話を聞かせていただき、被災されたお立場でありながら町の再生に向けて精力的に取り組まれていらっしゃるご様子、町民の方の意向を丁寧に汲み取り、綿密なご計画の下、業務を進めて来られたご様子にただただ頭が下がりました。町民への対応や復興に向けた計画とその実行に関しては、前例の無い、何も雛形のない中での遂行で並々ならぬご苦労があったのではないのでしょうか。

見ただけでは分からない、武内様と橋本様のお言葉から、双葉町の再生への強い思いが伝わって参り、郷土を愛するお二人のお姿に心打たれました。今は、それまで電力を支えていただいていた者の一人として申し訳ない気持ちで一杯ですが、神奈川に住む私に何かできることがないか今後も考えて参りたいと思っています。お手伝いできることがあれば声をかけて頂けると幸いです。どうぞよろしくお願ひいたします。

【参加者 No.5】**(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）**

- ・双葉海水浴場は本当に不思議だと思いましたが、漂着したゴミが無く、白く大変綺麗な海岸でした。



住民の方が町に戻られ、海を眺めたり、海岸を散歩できる日が必ず来てほしいと思いました。

- ・双葉駅から常磐道双葉復興インターチェンジ予定地までは結構な距離がありましたが通過地域が全て帰還困難区域であり、その広大さに改めて被災の規模を感じました。
- ・バスから見かけた田んぼは被災後 2 年間くらいは雑草の植生だったものが、今では 2m を越す木立の植生に変わって来ていて、5 年の歳月を改めて感じました。

(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）

- ・復興まちづくり計画が外部コンサルに任せるのではなく、職員の方が町民の目線で進められているお話を聞き、感銘しました。
- ・双葉町は現在町面積の 96% が帰還困難区域に設定されているが、来春予定されている区分見直しの際に除染計画区域が広がり、帰還に向けての兆しを感じられるよう望みたいです（そんな簡単な話では無いと思いますが）。
- ・町職員として中間貯蔵施設受入に向けての動きと、地権者としてのお立場と、簡単に言い表すことができない難しさを感じました。
- ・今年度採用新人職員のうち 2 名は福島県外遠地からの応募であったお話を聞き、殊勝な若者に幸多かれと思いました。

(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）

- ・計画戸数に対してまだ空きがあることを伺い、町民の方々のお立場、思いがお一人おひとり違うことを感じました。
- ・再開された町立の幼稚園、小中学校もご案内いただき、全学年の生徒数合計が 38 名と伺いました。せっかくの施設ですが、保護者の方、生徒さんのお考えを尊重されているお話に環境整備の難しさを感じました。

(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）

- ・いわきまごころ双葉会様とかながわ避難者と共にあゆむ会は、2013 年末いわきで双葉会さまの活動内容をお伺いして以来南台でのだるま市や神奈川での双葉町交流会を通じ避難されている方々の交流を重ねており、絆を繋ぐひとつの形としてこれからも継続させていただければと思っています。
- ・今回大橋事務局長様から双葉会活動の記録を伺い、いわき市民や他の被災町民との交流に腐心されているお姿に改めて感銘を受けました。

(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）

- ・他の被災町村と比べて帰還困難区域が広大であり、事故から 5 年経過しているにも関わらず復興に向け手を付けることができないこと、一方では中間貯蔵施設受け入れることが決まり、町民の方の計り知れない苦悩を感じ胸が痛みます。
- ・視察やお話を伺い、避難されている方の帰還や居住について自分が何もすることができないこと。
- ・神奈川に避難されている方々が故郷を思い、町や避難者同士の繋がりを必要とされる限りそのお手伝いを続けていきたい。



(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

- ・復興に向けて大変お忙しい中、視察ご案内や復興に向けての取り組みをご説明していただきありがとうございました。
- 自分の目で見たこと、お聞きしたことを踏まえて避難されている方々に自分が何かお役に立つことはできないかをよく考えて行動していきたいと思っています。
- ・遠い将来かと思いますが、双葉町の方と双葉海水浴場で海を眺めたり砂浜を散歩できる日が来ることを願って止みません。

【参加者 No.6】

(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）

緊張しました。帰還困難地区に入る時、ヘルメットにマスクをした警備の若い青年が、身分証明できる物と名簿を一人ひとり丁寧に確認しました。特別な所に入る気持ちでした。バスが進み、東電敷地のフェンスが見えてきました。1m ある輪の有刺鉄線、銀色に光りフェンスの上と下に続いています。原発が危険で事の重大さを感じる思いでした。

双葉海浜公園・マリンハウスふたばは、2011年に陸前高田や大槌に行った時と同じ状態で震災のままであった。原発放射能で帰還困難地域になり今も人が入れないためである。双葉駅の時刻表や棚に置かれていたパンフレット、錆びた線路、草の生えたホームや双葉のメインストリートの朽ちた家々、震災当日を思い起こされるようでした。双葉町の方々にとっては、もっと辛く心痛なことだと考えさせられました。

バスの中で橋本様のガイドで「ここは田圃でした。」と連発。草だけでなく木も生えていました。震災から時間が長く過ぎ、何もできない気持ちを感じました。

中間貯蔵施設予定地を見て、最終処分場も決まっていない中での中間貯蔵施設、複雑な思いです。廃炉だけで30～40年かかると言われている。もっと原子力の在り方施策をもち100年、何百年を考えた国であってほしい。そのための私を考え行動したいと思いました。

(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）

双葉町役場の武内参事から、被災の現状と復興が大変なこと、を改めて取り組んでいることを知りました。横浜にいと、テレビで東北被災地では、盛り土地をした住居店舗等の造成が終わり、入居募集を始めたが思ったように住民が戻ってこない新たな問題をレポートしていました。双葉町では、住居だけでなく、お店、病院、学校、福祉施設、そして仕事等が戻る条件、住民の気持ちに添った復興プランを進めている武内さん達のご苦労等々計り知れない苦労を聞け、頭の下がる思いでした。また、我が子の「ふるさと」、子どものふるさと親の伝えたいふるさとの違い、自分のふるさとと重ねて考え複雑な気持ちになりました。

(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）

復興公営住宅の計画は、双葉町帰還復興を込め、多くのことに心配りして計画されていることを知りました。実際にその地に立ってみると、計画立地の外側に川が流れ、川に沿って



田圃が広がり、事前の説明であった双葉町と同じような気持ちになれる自然と土地の場所でした。

また、復興住宅ができる前から、ここの地いわきの方々との繋がりコミュニケーションづくりを既に始めていらした。何事も人との繋がりを大切にしてい進められていること教えられた。そして、入居条件にもいろいろ生活・所得の方々を配慮した計画で、双葉町の一人ひとりを大事にした施策の実現を推進していることに驚いた。今、私たちにこの様に説明している時間も惜しいのではないか。

小中一貫教育を目指した新しい教育の双葉町の学校。教育も大事にして進めているが、地元いわきの小学校に行く子、それぞれ親が悩んでいることを知りました。本当に難しいことで複雑である。

(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）

岡田会長の言葉が重かった。一言ひとことが胸に迫ってきました。

一時帰宅も 10 回から 30 回に増えた。でも、自由に帰れない。許可を貰って自分の家に帰るのだが、検問所を通る時、「行ってらっしゃい。」と言われる。その先の言葉は無かった。

町の人達も自分たちの繋がりを作ろうと「いわきまごころ双葉会」をつくり、双葉町に戻る繋がりをつくっている。大変な環境の中でもふるさとづくりをしていた。「ふるさとの山や川、心のふるさと、心の底に残るふるさと、目に見えるふるさとへ…」 私にとって当たり前のふるさともう一度考えさせられました。

グループの交流会では、身近なことを沢山聞け、あっという間でした。私たちのために足を運んで頂き感謝です。

(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）

研修中、荒木さん長崎さん等のお話を耳にし、この研修の為に双葉役場の方々、いわきまごころ双葉会の皆様方が、休日にも関わらず温かく迎え、お話を頂けたのは、渡辺さんはじめ今日のスタッフ、kfop 方々の神奈川での活動があるからこそだと感じました。その点私は、「あゆむ会？」と言う状態です。

「双葉町民の歌」岩崎さんありがとうございました。双葉の歌を知ることと双葉の皆様と歌えたこと貴重な体験でした。岩崎さんは、他でもいろいろ活動しているのが「あゆむ会」なのですか。

帰還復興の計画は、目に見えてくるものですが、目に見えない内部被爆など健康についても気になりました。コミュニケーションを大事にしても、合同の小中学校は、小人数制教育を売りではじまったが、隣のいわきの学校に入学した子もいる。親の判断だが、複雑である。

今私のできることは、この体験を発信し、kfop の活動を伝えることである。そして一緒に



福島に行く仲間を増やしたい。

(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

双葉町役場の町長さん、橋本さん、武内さん、日本中に避難している町民を繋ぎ、元の双葉町を再建しようとする取り組み、放射能・津波にも負けないぞと、強く心を打たれました。自分の置かれた立場、前に進む、進むしかない。私たちが「大変でね。頑張ってください。」という言葉が恥ずかしくなりました。

また、「自分も被災者」「自分の住んでいた所が中間貯蔵の敷地に」「自分のふるさとは」多くの課題に立ち向かっていることを知り、何も私にはできることは無いですが、双葉町を知り感じる事が大切と思いました。

夜には、町長さんが婚礼の後でも、挨拶に来られご多用の中感謝です。町長は橋本さんと震災から双葉町づくりに尽力を尽くしていることを知りました。双葉町には、2人の町長さんがいるように思えました。

（最後に）

双葉町様視察研修を改めてありがとうございました。kfopのなべさんはじめスタッフ皆様に感謝致します。この会皆様方の心遣いが、私にとって福島バスへの居心地良さであり、活動継続になっていると思います。

また、報告書を見て、まず思いました。「双葉町様視察…」と書かれています。「双葉町視察…」でなく、『様』を付けています。こんな小さなところへの心遣いを知らされました。私の当たり前の引き出しが増えました。

【参加者 No.7】

(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）

帰還困難区域は震災から5年経った今でも、2011年3月11日のまま時が止まっていて、その様子を間近に目にすると、より一層、現実のものとして捉えることができました。

日本人全員が『日本の問題』として現実的に捉え、解決するためにどう行動すべきかを考え、実行する必要があると思います。

他人事、他地域のことでなく、自分事として行動する第一歩として、双葉町内視察は大変意味のあることでした。

(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）

避難者の方々が全国に点在し、行政機能も避難先の仮設という極めて厳しい現状の中、一生懸命施策を講じ、一步一步前に進めていらっしゃる内容を伺い、感服させられました。

**(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）**

現状を見ることもせず、「復興が進んでいない」とおっしゃる方もいますが、批判するだけはたやすいことです。実際にこの目で見て、着実に一步ずつ前に進んでいることをいつも実感します。

ただ、一方で、遅々として進まない部分があること、そこをどう乗り越えていくべきか。地元の方々だけではなく、私達若い世代も自分達の解決すべき日本の問題として向き合っていきたいです。

(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）

人は一人ひとり違って、だからこそ感じ方・捉え方もそれぞれ違うのだということ、地元の皆様とお話することで実感しました。全員が 100% 満足のいく結果というのは、あるのかどうかわかりません。けれど、より多くの方が幸せに暮らせる環境を整えていく必要があります。

そのために自分ができることが果たしてどの程度あるのか未知数ではありますが、精一杯考えて行動していきたいです。

(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）

震災、そして原発によって突然失われたふるさと。双葉町の方々の気持ちを思うと心苦しくなります。けれど、ただ心を痛め同情するだけでは何も変わりません。

次世代を担う私達若い世代は、どうすれば日本の課題の大きな一案であるこの問題を解決に導けるのか。

常に考え、小さな一步一步かもしれないけれど、今の自分にできることを着実に行動していくしかありません。その行動の一步として、今回参加させていただいたこと、双葉町の方々のご協力に感謝いたします。

(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

お忙しい中、お時間を割いて行動を共にしていただきましたこと、本当に感謝しております。

この経験、出会いを決して無駄にしないよう、自分にできることはわずかながらでも続け、貢献できたらと思っております。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。本当にありがとうございました。

【参加者 No.8】**(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）**

双葉町を視察させていただき、最初にまず検問所を通らなければ入れないという特別な区域になっているのだなと思い、バスが進む中、目にする景色は、私が経験した阪神淡路大震災の時より、街並み・家並みは大分ましに思いました。しかし、目に見えない脅威の存在がこの双葉町から人の気配を消してしまったのだなと、これからの季節、海水浴場百選に選ばれたあの美しい海にも、たくさんの人たちが訪れたであろう楽しんでる声も消してしまった。自然災害だけなら皆で力をあわせ町を再生させようと努力できるどころ、人間自らの手



で作上げた便利な生活・より良い生活のために作った原子力発電所の事故による放射能汚染、先の見えない大きな代償を残してしまったのだなと思いました。

(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）

双葉町が帰還困難区域となり、役場の機能を先ず埼玉県加須市に移され、その後福島県いわき市へ再移転され、現在そこを拠点にされていることを伺い、福島県全体が家族・親戚と考え、双葉町・いわき市・浪江町などなどが兄妹・従兄弟とし、自分の家が住めなくなったので親戚の家を間借りして、そこを拠点に生活していると想像した時、職員の方々のご苦労は口では伝えられないものもおありだろうなと思いました。

とにかく他県・他市へ避難されている町民の方々への支援や交流を絶やすことなく続けておられる様子をお聞きし、約 7,000 名おられた双葉町町民の方々が本当に求めている今現時点の希望内容と、役場として復興させようとしている内容と行政面でまだ多くの課題も抱えておられるようですが、このような私でも何か協力できることはあるのだろうかと考えさせられました。

(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）

福島県いわき市にある土地を国が買い上げて復興公営住宅建設予定地を用意していただき、今造成しているところを視察させていただき、そして中野地区復興産業拠点整備イメージ・計画案を拝見し、言葉だけでなく実際にこのイメージしているとおり多くの住民達が寄り集い、楽しくこの地で生活していただくための労力は計り知れないものがあると思います。

しかし、先頭に立って動いておられる総務課総括参事武内様、秘書広報係長橋本様、また、他職員の尽力、努力により、一つ一つ形となって実現されることでしょう。

(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）

住んでいた町を何の心構えもなく、地震と原発事故によって出なくてはならなくなったお心を思うと、辛くなります。

印象に残ったお言葉は、町へ、家へ帰る許可を取り、検問所を通る時、「はい、お入りください」「お帰りなさい」ではないこと、言葉への憤りをお話しされたことです。

一方、いわきまごころ双葉会として交流会を開催されておられ、人の繋がりを大切にされている様子をお伺いし、反対に力をいただきました。しかし、次世代の年齢層の方はどのような思いをされているのかが気になる場所です。

(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）

震災後からずっと活動されておられる kfop に出会え、そして長年の地元との信頼関係があるからこそ今回の視察実現されたのであろうことを思うと、本当にありがとうございます。

メディアの情報に惑わされず、自分の目で見て、現地の方々のお話を伺って感じたことを、これからも意識を持ち、まだこれからも変化していくだろうことも、機会があれば足を運び、新しい情報を収集し、私の身近な人達に伝えていきたいと思えます。

今回はまず神戸に帰ってすぐアルバムを作り、職場の人達に写真を見てもらいながら説明し、考える機会にさせていただきました。



私の仕事場は兵庫医科大学病院で、その中の放射線医療センターという部署になります。今回の福島の話をした時、師長が「私、震災直後、災害ナースとして行ったところが福島なんだよ」とおっしゃり、当時の様子もお聞きした次第です。先生も人体に与える影響などもご存じなので、色々考えることができました。

次に企画していることは、福島物産展（ちなみに、私の予算内のです）をしようと思っています。職場の人達に、買ってね、食べてねと、協力要請しました。

7月9日、伺うことにしています。皆様にまたお会いできることを楽しみにしております。ありがとうございました。

(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

今回初めて、震災後、東北、福島へ足を運び、自らの目で現地を拝見できましたこと、今までより一層、人の幸せとは何か、人の持つエネルギーの大きさとか、色々考えさせていただききっかけになりました。

遠い兵庫県からですが、自分のできることは何かないかと常に考え、福島県、そして双葉町へプラスとなるよう、私のできること、とにかく応援し続けていきます。

お身体をまず皆様お大事にされ、一つ一つ形となっていけますよう。一日一日の積み重ねが歴史となっていきます。これが新しい双葉町ですと、次世代の人達に自慢してください。

【参加者 No.9】

(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）

最初に放射性廃棄物の中間貯蔵施設の予定地を視察した。まだ手つかずの緑が残る土地もあった。この土地に次々と運び込まれる黒いフレコンバッグで地面が埋め尽くされた場面を見た時、町民の方々の思いは、いかばかりであろうか。

次に双葉町海浜公園を視察した。きれいな砂浜とは対照的に、ひしゃげた手すり、堤防の残がい、放置された建物など津波被害の跡が印象的だった。

高速道路のインターチェンジ建設予定地を視察した。たどり着くまで、細く曲がり、起伏に富んだ道を進んだ。このインターチェンジが復興への導入口となるのだろうか。

最後に双葉駅を視察した。駅舎及び駅前の通りや店などは、人が全くいないことを除いて、避難した時のままのようである。常磐線が再び開通した時、以前のにぎわいが戻るだろうか。

以上、視察した土地は、一般の人の自由な立ち入りが制限された場所であり、まだ何も復興工事が始まっていないので、東日本大震災直後の貴重な風景が見られた。

(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）

双葉町の役場の方から、町の現状と復興計画のお話を伺った。全町民が避難して、しかも県内外に分散して生活している実態をお聞きした。全国に散った町民の様子を把握し、将来計画への意見を集約していくのは、かなり大変な作業であると感じた。

そして、復興計画のお話を聞き、質問をした。計画の進行については、今後の除染計画を含めた国の対応など不確定な要素も多いと思った。

**(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）**

2 日目朝に復興公営住宅を建設する予定地を視察した。既に工事が始まっていて、整地が行われていたが、建物の建設工事はまだだった。建設予定地は、いわき市の中心部から少し離れており、近くの商店街にも少し距離がある。お年寄りなどの交通弱者が買い物をするのに不便がないだろうか。また、復興公営住宅に転居したあと、住民同士のコミュニケーションを維持していくことも必要になるだろう。

(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）

「いわき・まごころ双葉会」の理事の方々からお話を伺った。原発事故後の避難の様子、会のこれまでの活動の経緯、現在のいわき市薄磯地区（津波被災地域）の住民との交流など多彩なお話を伺った。後半のテーブル席での「いわき・まごころ双葉会」の方々との直接のお話では、東電の賠償への不満、被災者への差別、自殺した被災者のお話など、いままでお聞きしなかった個別のお話を伺った。いろいろな方々のお話から、原発事故後の避難での精神的な負担、心の葛藤、残念な思い、帰還への焦りなど、現在の被災者が抱える様々な気持ちを伺うことができた。

(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）

福島県のことや放射能汚染のことなどについて、正確な事実を知る必要があると思う。我々神奈川県民は電力会社の電気を毎日使っており、東日本大震災の前には福島原発で発電した電気も使っていたので、1 日目の視察で見た放射性廃棄物の中間貯蔵施設を他人事のように考えてはいけないと思う。現在まだ選定されていない放射性廃棄物の最終処分場も同様と思う。我々電気を使う側も、中間貯蔵施設や最終処分場の問題に、これからはずっと関心を持ち続けなければならないと思う。

(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

ご挨拶いただいた町長様、双葉町を案内して現状と将来計画を大変丁寧に説明していただいた町役場の方々、いろいろな思いを述べていただいた「いわき・まごころ双葉会」の町民の皆様には、ありがとうございます。また、大変お世話になりました。お礼申し上げます。

避難が長期になることによる町民の方々の精神的な負担、将来への不安は、相当大きなものではないでしょうか。全国に避難された方々をまとめる町役場の方々の御苦労もお察しいたします。私が今、できることは、双葉町の現状や避難者の様子を、正確に周囲の人々に伝えることでしょうか。双葉町への一刻も早い帰還ができることを祈っております。

【参加者 No.10】**(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）****●双葉町の今**

いまだ「地震」、「津波」、「原発」の災害・事故に見舞われ手つかずの状況を目の当たりにし、言葉を失いました。町の 96%が帰還困難区域となり、復旧にも着手できない現実がそこにありました。

●海水浴場



50 選にも選ばれたという町民の憩いの場が、災害・事故により戻らぬ場所となりました。一方で変わらぬ美しい砂浜、カモメの飛ぶ風景は変わらずそこにありました。

●看板撤去・保存の苦悩

「原子力 明るい未来のエネルギー」の看板は撤去され保存されているとのことでした。日本全国の小学校でも「クリーンなエネルギー」として紹介されていたことを昨日のこのように思い出します。

●復興に向けて

町の中心部から常磐道 IC 建設予定地まで見学し、手つかずの状況から今後のまちづくりに向け長い年月を要することを実感いたしました。

(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）

●構想(まちづくり)の大切さ

事前に町の HP を拝見したところ、3 月に決定された「町民一人一人の復興と町の復興に向けた、平成 28 年度の取組」においては、実に 158 もの施策があり、様々な視点で整理されていました。その構想をまとめられた町の皆さまの思いを重く受け止めておりました。何を質問させていただくべきか、考えもまとまらずに研修に臨んでしまったのが正直なところです。

ご説明の中では、新しい町の俯瞰図を示され、産業の復興に向けての構想も分かりやすくご説明いただきました。復旧・復興に向け、町民の皆さまがお考えになり、取り組まれている「まちづくり」の概要を理解させていただきました。

しかし、構想実現に向けての前提となる諸条件も、決して確定したもの、同時に決定できるものでもなく、その実現には不透明な要素も多いことでしょうか、逆に申し上げれば、その確からしさを議論しても満点の答えは無く、まず一步を踏み出すこと、見直しを続けながら進めることが大切であること、教えていただいたように思いました。

●元に戻す構想ではない

元通りの生活に戻れることを町民の皆さまも願っていらっしゃるのでしょうか。しかし、現実的には困難であり、新たな「まちづくり」をせざるを得ない現実に取り組んでいらっしゃいました。

言うまでもなく、少子高齢化は日本共通の課題であって、時間の経過とともに町に必要とされることも変化して行きます。復旧に時間を要するのであれば、その間に変わるであろう社会の変化を織り込み、新たな「まちづくり」をすることも重要であることを教えていただきました。

●構想作成のプロセス

「若い町民にも参加していただき議論を重ねた」とのお言葉が印象に残りました。コンサルティング会社に丸投げなどせず、押しつけでは無く、町民の皆さまの腑に落ち、共感できることが大切であることを教えていただきました。

●若者の夢

誤解を恐れずに申し上げれば「町の存亡がかかっている重要な時期」であると思います。その時に、将来を担う若い町民の皆さまが何を想い、何の実現を願っているのか。それが大切であることを教えていただきました。

**(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）****●高齢化を想定した公営住宅**

いわき市内に、新たな公営住宅の建設予定地がありました。かつて炭鉱の町として賑わっていた地区に隣接しており、いわきの方々も、町がまた賑やかになると歓迎されているとのことでした。高齢化にも配慮されているとのことでした。

●子供たちの置かれた状況

仮設校舎には運動場もなく、別施設の一部をお借りしている。高校は生徒が卒業し廃校となったとのことでした。子供たちの置かれた環境も厳しいものがありました。

(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）**●自治会の維持の難しさ**

自治会として声をかけるにも、気軽に集まれる距離ではなく、集まる場所の確保にも苦労されているとのこと、避難先でも様々な難しさに直面されていました。

●無念

「人災である」との重いお言葉もございました。都会から研修視察に訪れた我々に、ぜひその思いを伝えなければとのことのお気持ちが明確に伝わって参りました。重苦しい時間でした。しかし、それが未だに逃れられない現状であること、双葉町の皆様の無念がどれほどのものか、目を背けてはならない現状があると改めて思いました。

●まちとは何か

集まるために、車で送迎をされていた時期もあったそうですが、今はそこまではしない。「ご本人のお気持ちからでなければ続かない」とのお話もありました。難しいお話でした。伝統的な祭りやイベントなど、まちの絆を維持するため取り組みの大切を、町の皆様の視点からお聞きすることができました。

(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）**●研修視察に参加した者として**

研修視察便という機会を得て、多くのことを見、聞き、学ばせていただきました。正直に申し上げ、苦行に近いものと感じたこともあります。しかし、限られた時間であれ、そうした場に身を置き、目をそらさずに見て考えることが一番重要なことであったと受け止めています。

●見る目、聞く耳

マスコミもいろいろな視点で報道しています。テーマとされ継続的に状況を見ている研究者もいらっしゃるでしょう。一般人の私に必要なことは、あふれている情報にも、それぞれの解釈、仮説があり、主張が組み立てられていることを忘れないことではないかと思えます。

●人として

立ち止まり、自分なりに考えてみることの重要性を改めて思います。日々、何も考えずにしていることで、思いも寄らぬ事態を招くかもしれないのです。そして、気付いたらその時からやめるべきこともありそうです。

まずは私自身、地に足のついた考えとしまして、自らの健康の維持に努め、今後何をすべきか、何ができるのかを考えながら、一歩ずつ歩んで行きたいと思えます。

**(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）**

ご多忙中にも関わらず、他都市の一介の市民のためにお時間をさいていただき、誠にありがとうございました。まずは御礼申し上げます。

未だ厳しい状況に置かれた皆様のお気持ちを思うと言葉を失います。国として何を実現していただくのが最善かと自問しても答えは得られそうもありません。まずは、自分が見聞きしたことを一人でも多くの方にお伝えし、町の皆様の思いに触れていただくことが、今の私に課せられたことではないかと、重く受け止めております。

双葉町の皆様のまちづくり構想が実現する日まで、日本に住まいする者の一人として、応援させていただきたいと思います。

【参加者 No.11】**(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）**

双葉町役場の武内さん、橋本さんにバスに同乗していただき、町の様子をお話ししていただきながら、案内してもらいました。大熊町に入ってから「よく見て覚えてください。ここから中間貯蔵区域の敷地になります。どれだけの広さがあるのか、見て行ってください。」と言われました。大熊町から第一原発が見える近くまで行きましたが、原発の敷地になるところには有刺鉄線が張り巡らされていました。なんだか嫌な気分になりました。

双葉町に入ってから海浜公園に行きました海の色が青くとてもきれいで、砂浜もきれいで空も雲一つない晴天でした。お弁当を食べながら海を見ていると、震災があった場所だということを忘れてしまいそうでした。空気も澄んでいてとてもおいしく、今は人が住めなくなっている場所とは思えませんでした。

バスで移動する景色の中に「本来ここは田んぼですから」と何度も言われました。その場所は確かに田んぼなんですけど、草とそれ以上に木が沢山繁っていて、ビックリしてしまいました。田んぼの中に木が生えているなんて見たことないですから。5年以上も人の手が入らないとこんなになってしまうんだと驚くと同時に、悲しくなりました。夏にはセイダカアワダチソウで黄色一面になるそうです。

双葉駅へ向かう途中に、橋本さんのご実家が見えました。ここも、今住んでいるご自宅も中間貯蔵施設の土地の中に入っているのだと教えてくれました。大熊町内を走っているバスの中で「覚えていてください」と言われたところから長い距離を走りました。かなり広い土地です。そこが中間貯蔵地となります。先祖から受け継いだ土地がなくなってしまうこととなりますが、「誰かが引き受けなければならない。自己犠牲してでもやらなければならないことがある。」と橋本さんは言っていました。大熊町・双葉町の人達は、本当に原発事故の犠牲になっていると思います。

**(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）**

双葉町復興街づくり長期ビジョンや復興産業拠点の基本的な考えなど、町復興への思い、町再建への取組をいろいろとお聞きして、役場の方々は町の復興に向けて本当に一生懸命考えて取り組んでいらっしゃるのだと思いました。

双葉町の皆様は町への思いがとても強い方々だと思います。だけど、避難生活が長くなっていて、避難先での生活に慣れてくる方もあると思います。そうなると、帰還されない方も増えてくるかもしれません。今現在も、復興公営住宅が各地に造られているようですので、その土地でのコミュニティが形成されていった時、復旧・復興しましたから双葉町に帰還して大丈夫ですよ、帰ってきてくださいって催促されても、皆様直に帰還するよというふうに見えるのかなと思いました。

(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）

勿来酒井地区に個数 180 戸の復興公営住宅ができる予定地を見てきました。まだ何も建設されていないせいか、いまいちピンとこなかった。でも、いずれ完成して双葉町民の方々が移り住んでいかれることは確かです。そこで思ったことは、道路を挟んで反対側には先から住まわれているお家の方々がいらっしゃいます。コミュニケーションがうまく取れて、交流ができてくるのかなあと、ちょっと心配になりました。

(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）

いわきまごころ双葉会の皆様は双葉町を離れて今はいわき市の仮設住宅にお住まいになっています。ふるさとへのおもいを胸にして心でつながり、自治体を作って生活されていて、少しでも早くいわきの方々となじんでいきたいと思っていられるようです。

去年行われた七夕祭りには、まごころ双葉会の皆様も七夕飾りを作って参加し、喜んでもらえたんだよと、嬉しそうに話してくださいました。仙台の七夕飾りの少し小さめの材料を取り寄せて作るという本格的なものようです。ただ、作るのに場所がなかなか確保できずに困る時もあるそうです。元々の住民への遠慮があったり、ちょっと不自由な思いもあるようです。

なかなか難しい問題もあるのだなと思いました。冗談だとは思いますが、「小さくなって生活してっから」と言っていました。

交流会や催しに参加してほしいからと、自分で来られない高齢者の方を最初のうちは送り迎えしていたそうですが、けれど、だんだん負担になってきてしまったので送迎を止めたそうです。するとひきこもる高齢者がでてきてしまった。でも、仕方がないんだと言っていました。何だか悲しい現実ですね。

最後に、何か欲しいものとかってありますかとの質問に、気兼ねなく使える場所があったらいいな、欲しいなと言っていました。やっぱり肩身の狭い思いをされているんですね。

双葉町民の歌と一緒に唄えたのはとてもよかった。喜んでいただけたようです。バスの中で練習したから唄えました。ありがとうございました。

**(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）**

「帰還困難区域に役場の方が同行して町を回ってくれるなんて、なかなかないですよ。私だって入ったことがないです。それができる kfop さんはすごいですね。渡辺さんすごい。」って支援員さんに言われました。「私も一緒に行きたかったです。」とも言っていました。そのような視察研修に参加させていただき、ありがとうございました。渡辺さん・東さんの思いと人脈があってこそ実現できるのが、この視察研修なのですね。下見や色々な手続き、手配、本当に感謝しています。

双葉町の皆様がふるさとに帰れずに、県内・県外へとばらばらに避難されて、それぞれの土地で頑張って避難生活を続けていらっしゃることを、役場の方のお話を聞いて、まごころ双葉会の方々とお話ししてみても、改めてわかりました。「来てくれてありがとう」と言ってくださる双葉町の皆様と、これからも繋がっていったらいいなと思いました。参加させていただきありがとうございました。

(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

伊澤町長様、武内様、橋本様

視察研修の際は大変お世話になりました。休日にもかかわらず双葉町内を案内いただき、震災時の様子や今現在の状況をお話くださり、また、夜には宿泊までして復興の計画や課題についてもご説明頂きました。

本当にありがとうございました。復興に向けて沢山の課題や困難があると思いますが、町民の皆様の思いがかないますように、これからも頑張ってください。

いわきまごころ双葉会の皆様

交流の場を設けてくださりありがとうございました。少ない時間ではありましたが、皆様とともに双葉町民の歌を唄い、お話を伺ったことに感謝いたします。楽しかったです。

双葉町を離れ、いわき市で生活していくことになり、環境の違いに戸惑われたり、市民の方との交流の中で肩身の狭い思いもされていると伺いました。それでも前向きに地域住民の皆様と交流を深めていくことに努力されている感じが伝わってきました。

8 月の七夕祭りに向けて飾り付けを頑張っていってほしいと思います。これからもっと暑くなってまいります。どうぞ熱中症に気をつけて、素晴らしい七夕飾りを完成させてくださいね。

本当にお世話になりました。

【参加者 No.12】**(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）**

帰還困難区域内を視察。同区域は町の 96% を占める。その内の約 10% にあたる 5 km² に「中間貯蔵施設」が建設予定で、その予定地を視察。

5 km² の広大な規模を実感。自然豊かな風景がすべて施設になってしまうことに大きなと



まどいを感じた。

(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）

中間貯蔵施設の用地取得について、現在は 2.2%しか進んでいない。買収が完了するまで 30 年以上かかってしまうのではないかと感じました。ただし、これは国の役目。

福島の被災は「地震」「津波」「原発事故」の三重苦と言われているが、役場の方々はこれにプラスして「町民を守る（お世話する）」苦勞をされたことと知りました。退職された方もいると聞き、おどろきました。

(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）

予定地は造成中だが、規模が大きいと感じました。

双葉中、北小、南小を見学。グラウンドがない。となりのいわき錦小には大きなグラウンドがある。双葉中、北小、南小の生徒はうらやましがっているのではないのでしょうか。

(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）

会長の貴重な体験談を伺った。報道されない「生の声」は大変な収穫でした。

今回の研修で最もインパクトが強かったと思います。

(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）

武内様、橋本様が 2 日間にわたってアテンドいただいたことがうれしい。しかも、夜遅くまで会話できたことは大変ありがたかった。

今後、kfop と双葉町の情報共有を続けていければ良いと考えます。

(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

施設の建設を受け入れた経緯をもっと知りたいと感じました。苦渋の選択に至ったプロセス、国や県とのやりとりなども知りたい。

【参加者 No.13】

(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）

5 月 28 日（土）午前 10 時 40 分、いわき市東田町 2-19-4 の双葉町いわき事務所に到着した。

閉庁日でも数名の職員が出勤していた。伊澤双葉町長は歓迎のあいさつの後、「自分は職員の結婚式出席のため同行できないが、ベテランの武内裕美総務部総括参事と橋本靖治秘書広報係長がしっかりとご案内するので、双葉町の実相をすべて見ていってください。」と述べられた。

11 時、武内総括参事と橋本広報係長に同乗していただき双葉町視察にバスは出発。ならば PA、富岡 IC を経て国道 6 号線に入った。国道 6 号線の両側地区の住宅・農地・果樹園・山林などは 5 年前の 3 月 12 日で時が止まり、帰還困難区域となっている。海側は中間貯蔵施設建設用地を含む大熊町と双葉町の広大な帰還困難区域が続き、高木や雑木や丈なす草が生繁っていた。12 時前、双葉町役場近くのゲートに到着した。身分証と顔写真のチェックを受



けた後、バスはゲートを抜けて無人の双葉町役場庁舎を左に見て福島第一原発（以下、「1F」という。）のフェンス沿いに進み、左手に 5 号・6 号機の建屋と右に巨大な汚染水貯留水槽群の一部を見渡す地点で止まり、廃炉へ向けて作業が行われている 1F の様子を遠望した。その時、参加者の一人が、「1F の関係者から 5 号機の近傍に立っていた送電線の鉄塔が津波で倒されたことですべての外部電源が断たれて破局に至ったと聞いた。」と話した。当時は歴史考古学の評価が高くなかった時代で、貞観地震津波の痕跡を軽視し、コストダウンのために防潮堤の高さを抑えたので、防潮堤を高く乗り越えた津波により 1F の電源設備が機能を喪失したと思っていた。一般的にダムや原子炉建屋などの重要構造物以外の建築・土木構造物には基礎岩盤まで掘削するという着岩の思想が乏しい。送電線の鉄塔は着岩していない場合が多い。多くの場合、それでももっているが、もしも 1F の鉄塔基礎が着岩していなかったとしたらカタストロフィの引き金になった可能性はあろうと思った。

中間貯蔵設備予定地でフレコンバッグ試験搬入サイトを視察した後、巡視用道路を戻り、12 時半、双葉海浜公園に到着、海岸で昼食を摂った。日本の水浴場 55 選にも選ばれた双葉海水浴場と海浜公園は海岸の斜め右から津波に襲われ、町営のマリンハウスは 3 階まで津波に呑まれたが、かろうじて 4 階建ての姿を残している。海岸右手遠くに 1F が、左手はるか遠くに請戸漁港の白い建物が望まれた。この海岸も帰還困難区域にあり、遊びに訪れる人はいない。帰路、前田建設工業㈱の双葉町廃棄物処理場作業所現場に立ち寄り、津波で流失した遺品が展示されているのを見た。

役場庁舎前のゲートを出て、十字路向かい側のゲートでまたチェックを受けて、国道 6 号線の左側の帰還困難区域を視察した。双葉町の中心街の道路両側の商店や住宅は、地震で倒壊・半壊・一部損壊したまま 5 年が経過し、庭木や草が生い茂ったまま放置されている。常磐線双葉駅も 5 年前のまま放置され、プラットホームや線路には草が茂っていた。双葉町では双葉駅周辺は駅東・まちなか再生ゾーン・新市街地ゾーンとして復興を計画している。県道広野小高線沿線の水田も草や雑木が茂っているが、双葉町はこの地区を水田再生活拠点や産業・研究・業務などを集めた中野地区復興産業拠点として計画している。復興計画の実施にはこれら建物の撤去や農地の除染が前提となる。

(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）

17 時から宿舍会議室で武内総括参事と橋本広報係長から被災の現状と復興への課題を説明頂いた。

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分、三陸沖を震源とする M9 の大震災が発生し、双葉町は震度 6 強の地震と津波で死者 53 名、行方不明 1 名の被害を出した。翌 12 日、1F の事故発生し、政府の緊急避難指示により 20 km 圏外の川俣町に 5～6 時間かけて避難した。これ以降→3 月 19 日、バス 40 台でさいたまスーパーアリーナへ 2500 人が避難→3 月 31 日、加須市旧騎西高校へ避難（現在も避難者 477 人が居住し、双葉町埼玉支所設置）。→25 年 6 月に役場をいわき市に移転と、転々とした。

平成 28 年 4 月 1 日現在、町民のうち 4072 人がいわき市（2081 人）、郡山市（726 人）など福島県内に、2896 人が県外（埼玉県 854 人、東京都 337 人、神奈川県 181 人など）に避難している。双葉町ではこれら全世帯にタブレット情報端末を配布して行政情報などの周知を図るとともに、避難者に自治会の結成・加入を促し、各種行事開催などによる町民の連帯

と意識の一体化を図っている。

アンケート調査では、双葉町へ戻りたいと考える町民は約 13%、就職・子育て・住宅取得などで戻らないと決めている町民は約 55%、未だ判断がつかないという町民は約 21%という。しかし、双葉町での環境条件が生活可能になれば帰還する町民も増えると思われ、双葉町は復興と帰還できる環境造りのプランをコンサルタントに依存するのではなく、双葉町をどのように復興させたらよいか町民に意見を求めて議論し、復興計画を策定した。復興への取り組みは、現在の避難場所での町民の生活再建を促進しながら町民の連帯と共通意識を強化し、双葉町帰還の環境条件を一つ一つ解決・整備して復興と帰還を迫及しようとするもので、次の要目を骨子としている。

復興公営住宅を中心とした双葉町外拠点の構築

町立幼稚園・小中学校の再開

町民の絆の維持・発展、コミュニティの維持

まちなか再生ゾーン・コンパクト拠点、双葉駅周辺地区の整備など町の復興

中野地区復興産業拠点、両竹・浜野地区農業再生モデル事業、復興祈念公園などの推進

双葉町は町域の 96%が帰還困難区域で、避難指示解除準備区域は 4%に過ぎず、被災市町村の中でも最も過酷な条件にある。他市町村で進んでいる倒壊建物の撤去・片付け、インフラの復旧なども一部を除き未着手である。除染も避難指示解除準備区域など一部の地区、一部のモデル事業的なもの以外は未着手である。これらを実施・解決して、その後に新しい復興プログラムを実施に移すことになる。まさにマイナスからの出発であり、双葉町は町民に復興計画を提示・説明し、町民の生活再建策を講じると十に、町民が帰還困難区域に戻れるように除染とインフラ復旧を進め、復興に挑戦しようとしている。

現在の最大の課題が中間貯蔵施設の用地確保である。大熊町と双葉町は苦渋の決断の末、中間貯蔵施設の建設を受け入れた。平成 27 年 3 月から同 30 年 3 月までの期間に、両町にまたがる 16 km² の帰還困難区域の中に 350 万 m² の中間貯蔵施設を設けて、相双郡から出る総量 2200m³ と想定される除染土などを中間貯蔵する計画であるが、土地の確保は現在約 2.5%、双葉町関係では約 5 万 m² という。5 月下旬、大熊町は町有地を中間処理施設に提供することとし、双葉町も同様な措置を講じようとしているが、民地の多くが相続・登記されておらず、関係人は全国の約 9000 人にも達し、用地取得をめぐる合意形成は極めて困難である。これを解決するには、国の強力な施策とイニシアティブが不可欠で、特別立法など措置が講じられないと進まないのではないかと思った。

(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）

29 日(日)9 時 45 分、武内総括参事と橋本広報係長のご案内で、いわき市勿来酒井地区の県営復興公営住宅建設予定地に到着し、視察した。復興公営住宅は避難している町民の生活再建および復興と帰還への双葉町外拠点と位置付けられ、4 階建ておよび 3 階建て 6 棟の共同住宅 108 戸、戸建住宅 72 戸計約 180 戸の住宅の他、広場、集会所、診療所、高齢者サポート拠点、住宅用および施設用の駐車場、仮設店舗スペースなどを整備する計画で、平成 30 年 3 月完成を目指して基盤整備工事が進行中であった。

避難者の生活再建がなり、元気になるなければ、避難者の明日への意欲も生じがたく、双葉町の復興も帰還も考えられない。大熊町でも町内に建設予定の復興公営住宅の構想は説明

されたが、具体的な内容は聞けなかった。それはこのいわき市と帰還困難区域にある大熊町との条件の違いによることであろうが、この町外復興拠点復興公営住宅という構想は大変良いと思う。双葉町・いわき市・福島県 3 自治体と住民の協力でこの復興公営住宅建設が成功し、その成果が双葉町の復興と帰還につながっていき、双葉町避難者にはもちろんのこと、いわき市民にも、また、ここだけでなく他の地区でも、将来にわたって元気を与え続けるものであってほしいと思う。

ここに至るまでには、双葉町、いわき市、福島県の考え方とその折衝・調整など、関係 3 自治体の担当者の方々の努力と協力は大変なものであったと思われる。また、住民の協力も必要であった。復興公営住宅付近のいわき市窪田地区の住民は公営復興住宅建設も見据えて、双葉町からの避難者との交流と協力を提案し、両者連帯して行事などに取り組んでいるとのことであった。

復興公営住宅建設予定地を視察した後、いわき市錦町にある双葉町立幼稚園と、小学校・中学校の仮設校舎を視察した。双葉北小学校と双葉南小学校は同じ仮設校舎に同居していて、ここでは幼稚園園長を含め 4 人の校長がいて、小中学校の生徒は合計で 36 名とのことであった。両小学校は、前日、震災発生後初めて、全生徒 26 名で合同運動会を開催することができたと、福島民報が報道していた。双葉町民には万感迫るものがあったのだと思う。

(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）

10 時 40 分、双葉町いわき事務所に到着し、11 時から 1 時間ほど、いわき市内の借り上げ住宅に避難している双葉町民の自治会「いわき・まごころ双葉会」と研修参加者 21 名との交流会を開いた。

同会からは、岡田会長、石田副会長、大橋事務局長、横山さん、里見さん、細沢さん、石田さん（会長の奥様）、福岡さん、大橋婦人部長などが出席された。

岡田会長は、いわき市避難者のうち、まごころ双葉会には 133 世帯が入会している。いろいろな集会や行事を開催して避難者の連帯を図っているが、なつかしい故郷への想いは消えない。双葉町に帰るたびに検問をつらく感じる、と述べられた。

大橋事務局長は、会は 38 世帯で発足したが、現在 133 世帯になった。いわき市に広く散らばっていて、様々な理由もあるが、集まりづらいこともある、と話された。また、ご自分でまとめられた「双葉町の記録」を開いて、双葉海水浴場、双葉ばら園、双葉高校などについて説明された後、3 月 11 日の震災発生、12 日の川俣町への緊急避難の状況、厚生病院の入院患者の避難、19 日のさいたまスーパーアリーナへの移転、31 日の加須市旧騎西高校への移転などの苦労の状況を説明された。

また、まごころ双葉会では県内市町村への日帰り旅行で避難者と被災者の交流を行い、ダルマ作り、七夕飾りなどによって故郷をしのび、他方、いわき市再発見ツアーなどを開催して塩屋岬灯台を見学する地元との交流を図っていること、いわき市薄磯地区自治会などとの交流会を開催していることなどを説明された。

その後全員が 4 グループに分かれて、私たちのグループには大橋事務局長と横山さんと里見さんに加わっていただき、懇談した。双葉町民の半数近くの人が福島原発関係の何らかの仕事に従事していて、その他流通・飲食店などのサービス産業も含めれば双葉町の 8~9 割



の人が東京電力関連の仕事に関わっていたのが、3月12日川俣町へ緊急避難することになった。

原発関連の仕事をしていたので、震災発生後、仕事はすべてなくなった。帰還困難区域の復興については、放射線についてはよく知っているが、町民にはあまり話したくないとのことであった。

川俣町の後、中通りの避難所などを経ていわき市に移転した方は、いわき市で住宅を購入したので復興公営住宅には入居しないとのことなどをお話しされた。

また、緊急避難した後、貴重品などを持ち帰るために短時間の帰宅が許されたそうであるが、実際には頭が混乱して、ペットフードの持ち出ししか考えられなかったとのことであった。

自分自身の経験からも言えることであるが、平日頃から非常持ち出し物品を整理しておき、常に持ち出しを意識していなければ、とっさの場合対応は難しい。災害ボランティアも災害時に予想されるあらゆる事態を想定して、日ごろから訓練していなければならないと思った。

(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）

私は退職するまで 43 年間、民間団体の日本ダム協会でダム工事関連の用地補償の問題やダムの設計施工技術関係のセミナーの開催や出版、さらにはダム技術者の資格認定試験などを担当していた。

そのため福島県下の真野ダム、高倉ダム、横川ダム、大柿ダム、坂下ダム、滝川ダム、木戸ダム、三春ダム、四時ダムなどを何度も訪問しており、浜通りの各市町村の様子や山野の風景など記憶に残っていた。また、ダム以外でも、川俣町など福島県の生糸や絹織物が横浜港の重要な輸出品であったこと、関東大震災の時、原ノ町に立っていた無線塔のことなども、横浜市民には忘れられないことであった。

その地域が東日本大震災の地震と津波により甚大な被害を受けた上に、東電福島第一原発事故で放射線被曝し、災禍にみまわれた地域の住民が郷里を追われ県内・外に避難している。

今回、町域の 96%が帰還困難区域で 4%が避難解除準備区域という双葉町の町や農地、海岸を、何よりも中間貯蔵施設建設予定地の現状を見て、双葉町の復興と帰還へ向けてのマイナスからのスタートの困難さを強く思ったが、同時に、双葉町が計画している復興計画がこの困難を克服して実現するよう願った。そして、時間はかかるろうとも双葉町は復興と帰還を果たすと思った。

それは伊澤町長と、双葉町総務課武内裕美総括参事ならびに橋本靖次秘書広報係長はじめ双葉町役場の各位の強い意志と周辺の大熊町やいわき市などの自治体や福島県の連帯と協力を感じたからである。伊澤町長と、武内総括参事、橋本靖次係長はじめ双葉町の皆様の復興への責任感と情熱に感銘を受けた。双葉町の意欲や情熱が国や県や他の市町村の担当者にも伝わってゆくように期待したい。私たちの神奈川県や横浜市も、限界はあっても、その支援を続けてほしいと思う。

また、双葉町職員も緊急避難から復興計画策定まで非常に困難な業務を地元の町の職員として現役で担当できることは、公務員としてやりがいのあることではないかと、部外者の無責任な感想であるが思った。

今後、災害発生時の避難の際、ペットや牛などの家畜の扱いや世話は大きい問題になると

思う。

クロスロードの設問で、ペットを避難所に連れていくことの可否が問われるが、正解はない。人とペットの存在の重さはおのずからあるが、現在のわが国ではペットは家族の一員となっている。避難所が自宅と遠く離れていて、避難所で人とペットとが分離できる空間があり、アレルギー、鳴き声、排せつなどの問題がクリアできるような場合は、ペットも一緒に避難するのが私は正解と思う。自宅から遠方の避難所に避難してペットの世話ができない場合、それだけで精神的に追い込まれ、病気になる避難者も現れよう。ペット救出ボランティアが動き出すまでには日数がかかってしまう。ペットは避難者自らの責任で面倒を見ることによって、避難者も元気になり、避難所の仕事を手伝う勇気も出てくる人もあろう。熊本地震の避難所で簡易トイレの掃除を外部から来たボランティアがしていたが、なぜ避難者が自ら掃除しないのか不思議に思った。避難者が自立していたら、水運びを手伝っていた一部の中学生のように、自然発生的にボランティアが生まれていたのだと思う。

双葉町の帰還困難区域でも比較的線量の低い地区では、今後、復興計画に合わせて除染や倒壊家屋などの処理、家屋内外の片付けなどが始まる。私も、足手まといにならなければ、ほんの少しでも復興へ向けての手伝いたいと思う。

(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

5月28日（土）11時、いわき市東田町2丁目19-4に避難中の双葉町役場に到着しました。閉庁日でしたが、数名の職員が詰めておられて、やはり被災地の町役場と緊張しましたが、そればかりではありませんでした。伊澤町長がわざわざご挨拶くださるということは全く予想外のことでした。

双葉町総務課武内裕美総括参事と橋本靖次秘書広報係長には、バスに同乗されて詳しく帰還困難区域のご案内・説明をいただき、町中や農地など現地の様子がよくわかりまして、誠にありがとうございました。双葉町視察中、小生には、誰もいない無人の双葉町の町中でも、双葉駅でも、あるいは海岸でも、ずっと、町民の方々から「よく来られた。すべて見て行ってください。」という声を掛けられているように感じました。

29日にはいわき市に避難中の双葉北・南小学校、中学校の仮設校舎を拝見しました。困難な状況下で、これらの幼稚園・学校の開設と運営を進められた双葉町の皆様のご苦勞を拝察しました。

また、当日姿は見ませんでしたでしたが、園児・児童・生徒の皆さんが元気溼刺に学び、将来は双葉町の復興に貢献してくれると嬉しいです。

また、いわき市内避難者の「いわき・まごころ双葉会」の皆さまと懇談でき、被災時から、避難の苦勞、避難場所での自治会の活動と諸課題などについてお話いただきました。今後のボランティア活動のために勉強させていただきます。

末尾ながら、遠く離れた神奈川県からの民間サイドの視察に、ご多用にもかかわらず、親切・丁寧にご対応いただいたすべての双葉町の皆様に、篤く御礼申し上げます。

**【参加者 No.14】****(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）**

海水浴場百選に選ばれた双葉海水浴場は、海も砂浜もとても美しい分、悲しいものがあった。あちこち、特にマリンハウスや松林に残る地震・津波の傷跡はあの日のまま。事故前のにぎわいを取り戻すことはないのだろうか。

ゲートをくぐるたびの本人確認、厳重な警備。防災の意味合いもあるとはいえ、自宅に入るのに検問を受けることは、町民の方の大きな心の負担になっていると。

酒蔵もある趣のある旧街道、かつてはにぎわっていた商店街、ホールも併設されている立派な駅舎。いずれももちろん人影などなく、ほぼ手付かず、3.11 のまま。

平成 31 年供用開始予定の復興 JC 設置予定場所まで続く道の両側の水田には、草だけでなく木も育ち、土壌の良さを感じる。

浪江で靴裏のみのスクリーニングを受けて四ツ倉へ。道の駅よつくら前には高い防潮堤ができていて、昨年とは風景が変わり、海が見えなかった。復興の証なのだろう

(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）

双葉町は 96% の帰還困難区域、4% の避難指示解除準備区域。平成 23 年 3 月 11 日以来変化はない。区域が見直される（除染が進む？）のは、早くても事故後 6 年、あと約 1 年先になるとのこと。そんな中でも、町に帰りたいと考える町民はわずかながらも増加している。

堤防、防災林、復興祈念公園、・・・ 職場確保に向けての復興産業施設、併せてインフラ、市街地・住居地の整備。

「常に町民の目線を大切に」「町民の声を取り入れて」考えられた復興計画は進んでいる。

これから除染を始める段階で、現実的なものとして捉えることが難しいが、着実に進めていくことで、戻りたいと思う町民もさらに増加するのではないかと思う。

(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）

診療所も設置し、高齢者への配慮も行き届いた一つの町のような計画。あくまでもいわき市内ということで、周囲との関係・交流がうまくいくのか気になるところ。市民≠住民。難しい問題だと思う。

(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）

会長はじめ皆様から「双葉町」を紹介していただいた。

「双葉町民の歌」の歌詞の中にもすばらしい町であったことがうかがえる。

「双葉町民の歌」、涙しながら一緒に声を合わせていただき、私達も胸がいっぱいになった。

原発から 3 km、5 km、10 km と、次々と広げられる避難区域、具体的なことを何も知らされぬまま、目に見えない放射能から逃れて。

いわきに落ち着きはしたものの、市民ではないことの苦労も多いと聞いた。

婦人部の皆様も、活動するにも気軽に使える場所の確保ができず、苦慮しているとのこと。いわき市は広すぎて、移動も大変だとおっしゃっていた。

そんな中でも、七夕飾りを作り、お祭りに参加したり、会津の避難者の方々との交流を持つなど、前向きに積極的に活動されていらっしゃる。

ただ、そういう場に参参加することができず、引き籠ってしまう方がいると聞き、仮設住



宅に伺っての支援など、何かできることはないだろうかと思つた。

(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）

ふるさと、というものを、改めて考えさせられた。自分は今暮らしている場所にどれほどの想いがあるのか。何としても戻りたいと思うのだろうか。何代も同じ土地で暮らし、脈々と繋がりがあり、同時に横の絆も強く深く、何よりも、今回で言えば“双葉町”そのものへの、強い思いを感じた 2 日間だった。

その町が元どおりにならないこと、お金でどうにかなるものではないこと、5 年が過ぎ、心の苦しみは大きくなっていること、その中で力強く復興に向けて頑張っていること。忘れるなんてとんでもない。

原発事故後も。火力発電所の稼働している福島。東電ユーザーとして重く受け止めなければいけないと思う。

(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

貴重な週末の 2 日間を kfop のために費やして、現状や復興計画を細かく丁寧にお話しいただき、ありがとうございました。

被災者でありながら、行政という立場でのご苦勞も多く、でも何とか前へ進もうとするお二人にも、双葉の強い思いを感じました。厳しい状況の中、町長に就任された伊澤様、お忙しい中かけつけてお話しくださいましてありがとうございました。

全国に散らばってしまった町民の方々が、双葉に帰ることを望んでいる方々が、双葉町に戻れることを祈りつつ、神奈川から寄り添っていきたいと思います。

【参加者 No.15】

(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）

視察させていただいて本当によかったです。

想像力が足りないのか、写真で見ても、ほかの方から聞いても、なかなか実感がわからないので、その場所を実際に見て感じられる機会はとてもありがたかったです。

（ただどちらかというとな体を動かしたい方なので、どうしても視察は気持ちの切り替えが難しいです）

ちょうど田植えのシーズンだったこともあってか、町の中をバスで走っているときになんども「この両側が田んぼでした」「両側は田んぼでした」と過去形でおっしゃられるのが、明るくおっしゃっていらっしゃいますが、無念の気持ちが伝わってきました。

視察の翌週に会津で 20 年近く放棄していた棚田の田植えをしてみました。長い間期間が開いてしまうということの影響や、その田んぼを見続けなければならない気持ちを改めて感じることができました。

時間は少しかかるかもしれませんが、あの道沿いに稲が育つところを見たい、そしてそのお手伝いがしたいと思っています。

**(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）**

被災の現状について、発災直後からの流れをきちんとまとめてお聞きできたのが大変わかりやすかったです。

双葉町ならではの課題（バラバラの段階的な避難、日本全国に散らばってしまった）ということもお聞きして、避難にもいろいろな状況があり、それを支える行政の方のご苦勞がしのばれました。

復興計画について、コンサルにまるごと依頼するのではなく自分たちで住民の皆さまのご意見を聞きながら決めていった、とおっしゃられていたのが本当に町を愛していらっしゃるのだなと感じました。

(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）

いわきや福島県全体にいえることですが、とても自然豊かで予定地もいいところだと思います。ただ予定地を見た後にまごころ双葉会の方と懇談をした際に「もう家を建てたからあそこには行かない」とおっしゃられていたことに5年の時を感じ、現状でも相当ご苦勞して早くされたのだと頭では理解しながらも「もっと早くできれば、もしかしたらみんなが一緒に住めたのだろうか」と思ってしまうことを止められませんでした。

(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）

まず神奈川で何度か顔を拝見した皆さんと、いわきでお会いできたことがうれしかったです。新たなことを自分たちで、新しく始めようとされている皆さんの強さを感じました。

会話の中で「言葉では言えないことがたくさんある」「いえる相手といえない相手がいることもたくさんある」とおっしゃられていて、町の中でのつながり、今回の避難が「人災」であることを改めて強く認識しました。

帰りのバスの中で話をしていたのですが、あの会の場に出てこられている方以外の皆さんのことが、勝手にですがやはり心配で気になります。外に出る力、誰かとつながる力はどうすれば生み出せるのか、そのために神奈川で何ができるのか、を改めて考えていきたいです。

(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）**(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）**

初日のお昼に海岸でお弁当を食べて、海を見ていました。

私が生まれたところもすぐ近くに海があって、山があって、海沿いには工場があります。

そして、少し離れた場所ですが、原発もあります。

双葉町民の歌を今回歌わせていただいたときに、自分のふるさとと重なってどうにも言い表せないような心持になりました。私にできることは本当にわずかなことしかありませんが何かできることがあれば、お手伝いさせていただきませんか。

もともと震災があって初めていった福島ですが、何度も何度もお手伝いに行くうちに、「自分が決めたふるさと」のように感じています。

**【参加者 No.16】****(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）**

道路にあった瓦礫等が撤去されていて遠目で見るとあまり気にならなかったのですが、近づくると双葉駅周辺は当時のままの生々しい状態で、改めて原発事故の恐ろしさを感じました。

地震で倒壊してしまった建物、人が住まなくなつて 5 年以上が経過し、傷みの激しい建物が今にも崩れそうな現実は心が痛くなりました。

双葉海水浴場ではマリンハウスふたばが津波の高さを物語る形で当時のまま残っており、津波の破壊力を目の当たりにしました。

海水浴場周辺は帰還困難区域と異なり、津波の被害もあって何もない状況でしたが、一日も早く双葉町の方々が帰還する意欲が湧くようなものになってほしいと思いました。

(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）

震災当時の混乱した様子やさいたまスーパーアリーナへの避難、騎西高校への避難された時のお話をお聞きし、私自身も少しばかりですが、お手伝いをさせて頂いた頃のことを思い出しました。

他の町の復興計画は住民の意見も取り入れている部分は一部あると思いますが、双葉町のようにかなりの部分で住民の意見が反映されているということ伺い、より住民目線で復興計画を策定されているということが伝わってきました。

双葉町の避難されている方々が、いわき市、郡山市、会津若松市、加須市を中心として全国各地にいらして、双葉町民としてのつながりをこの先どの様に保っていけるかが気になりました。復興公営住宅も一カ所ではなく、距離の離れた地域に複数予定されているので、地域の絆が薄れないよう皆様のふるさとへできる限り多くの方が戻れるよう住民の方々のサポートをして頂ければと思いました。

(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）

いわき市の復興公営住宅予定地は今まで見てきた富岡町、大熊町のように自らの町に作るのではなく、いわき市に作ることもあり既存の商店や交通インフラもあり、他の原発被害の町より環境的にはとても恵まれたものだと思います。

(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）

会長の冒頭挨拶でふるさと双葉町へ帰りたいというメッセージが心に強く残りました。

短時間でしたが、交流を通じて双葉町の魅力をお伺いしたり、郷土文化である双葉ダルマのお話を聞いたのはとても興味深かったです。来年のダルマ市にはぜひ伺いたいと思いました。他の町の方々よりもふるさと双葉町へ帰りたいという意志がとても強く感じられました。

(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）**(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）**

お忙しいなか、町長、町職員の方々に町の状況を詳細にご説明頂きありがとうございます。ありがとうございました。

私たち神奈川県民からできることは限られているとは思いますが、皆さんがふるさと双葉町へ帰るお手伝いが何か少しでもできれば、お手伝いをしたいと考えています。

離れた所に住んでいても双葉町民としての繋がりを大切に頂き、一日も早く一人でも



多くの方が双葉町へ帰還されることを心より願っております。

【参加者 No.17】

(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）

kfop の活動の後、国道 6 号線を通っていて、ゲートの中はどうなっているのか、いつも気になっていた。

今回、双葉町職員の方の案内で帰還困難区域を視察させていただいた。言われなければ分からないほど草の生い茂った田んぼ、中間貯蔵施設、福島第一原発内の汚染水タンク、双葉海水浴場を見て回り、海水浴場で昼食をとった。海水浴場百選に選ばれた海はとてもキレイな砂浜だった。

昼食後は双葉町のメイン通りを通って、双葉町復興インターチェンジ予定地、双葉駅を視察。双葉町メイン通りの家々はところどころ朽ちて、もの悲しい風景が広がっていた。双葉駅前の駐輪場には、震災当時のまま自転車が置いてあり、時間が止まったままだった。

(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）

原発事故により全町避難で不自由な生活を余儀なくされている双葉町民のために、復興公営住宅を作る計画があるが、対策が遅く感じられる。仮設住宅の傷みが進んでいるので、一日も早く建ててもらいたい。中間貯蔵施設に貯蔵されるフレコンバッグの耐久性も心配である。

中野地区復興産業拠点の民間企業誘致、産業交流センター(仮称)での町民の一時帰宅の際の滞在・交流施設などを作るなら、除染もしっかり行ってもらいたい。

(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）

いわき市勿来酒井地区の復興公営住宅予定地の広大な土地を視察して思ったのは、仮設住宅に入居されている方達のためにも、1 日でも早く建設を開始して、傷み続けている仮設住宅から解放されるように、復興公営住宅を完成させてもらいたい。

宮城県・岩手県の復興公営住宅に入居した高齢者の引き籠りが問題になっているので、その対策も取ってもらいたい。

(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）

岡田会長のお話を伺いました。岡田さんはハナミズキが好きで育てていたのですが、震災後手入れすることができずにいたところ、花を見に行った時に花に元気がなかったそうです。面倒を見てあげないと花もわかるのかなと、しみじみとおっしゃっていました。

農業経験豊富な女性が双葉町から少量の土を持ってきていわきの畑に撒いたところ、いわきの人に放射能汚染された土を撒くなと言われ、自ら命を絶ったそうです。他にも、数人、心無い一言で命を絶った人を知っているようです。とてもやるせない気持ちになりました。

**(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）****(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）**

今回の視察研修に参加した動機は、しょうなん茅ヶ崎ボランティア（TAJ）でお手伝いしている双葉町ダルマ市で双葉町の方々とふれあっているうちに、双葉町に興味を持って参加しました。TAJ メンバーに双葉町出身者がいて、Facebook に載せた写真を見て懐かしがっていました。双葉町の方々が何時帰還できるのかわかりませんが、一日でも早く帰れる日が来ることを祈っています。

【参加者 No.18】**(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）**

この先帰宅困難区域につき通行止め 原子力災害現地対策本部 双葉町、通行証がなければ帰れない現実が悲しい事です。

検問での一つ一つが双葉町の皆さんの心のふるさとを遠くしているような気がしました。

役場内も当時のまま、最終処分場はこれから、中間貯蔵施設に係る用地、一年間の試験パイロット輸送、復興 IC、たった 4%の避難指示解除準備区域、生活再建、復興まちづくり、目の前の汚染水、第一原発廃炉作業、双葉駅西側の除染、孤立、住民票…。

私たちがさえ怖く、不安だったことを思い出し、あの日の風向き、爆発した時の気持ちはどんなだったのかと改めて、皆さんの怒りと深刻さを改めて感じました。

以前は人口を上回る人でにぎわった海水浴場、海浜公園でのお昼、マリンハウスふたばにお邪魔させていただき、いつの日か、つながる場所になっていくといいなあと思いました。

(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）

町民の意見を取り入れた復興を目指し、拠点に通える、きずなの維持、町立幼稚園・小学校・中学校の再開、いわき市勿来酒井地区の復興住宅、除染…かたちが見えてくれば帰ってくる人が増えるかもと期待し、町民が戻るまちづくりを基に生活再建ができれば素敵です。

しかし時間もかかり、それぞれの立場も違い、現状はかなり難しいと思いました。

次世代へとつながる双葉町へなるよう、皆さんの努力が欠かせないものだと思います。

(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）

予定地を見せていただいて、町民が戻ってのまちづくりが大事だと思いました。

窪田地区の皆さんと共生していくこれからの楽しみにしています。

都心のインターナショナルスクールよりも設備が整った、「梅檀は双葉より芳し」と掲げられた双葉中学校、双葉南小学校、双葉北小学校、ふたば幼稚園はこれからもいわき市とのかわり方、あり方を前進させ、特化した学校へなると素敵かもしれませんね。

(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）

私はまごころ双葉会の方々とお話をするのは初めてでした。

今までの経緯や双葉町内を見せていただいたので、以前の町の様子や当日の様子を伺いながら私なりに思い描くことが少しできました。

私たちと双葉町を含め平和利用という原発とのかかわり、今もたくさんの原発が日本にあ



ることなどをあらためて認識しながら、当日のお話や現在までの現実を伺いました。

(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）

(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

今回は岩崎さん、戸沢さんの提案で双葉町民の歌を歌うことで、YouTube で以前の双葉町の様子を見ることができました。梅檀の木は神奈川、葉山にもあるようです、こずえの先に薄紫の花が咲き、薫風に吹かれて花が足元にいっぱいだそうです、山歩きをするときに注意しながら出かけてみたいものです。

双葉町をふるさととして大事に思う方々と同じように、町を離れて暮らす子供たちや、次の世代にどう受け渡せるのかとおもいました。もっとたくさんの方々に現状を見ていただきたいと思いました。

2 日間にわたり同行していただいた、橋本様・武内様にはその場、その都度いろいろな質問にも答えていただきお話を伺うことができ、とてもよかったです。伊澤町長も足を運んでいただき、今回の研修の機会をいただいたことを感謝いたします。

【参加者 No.19】

(1) 双葉町内視察して（事実・感じたこと）

定期的にボランティアに行っている南相馬市小高区や以前に視察した富岡町と比べ、沿岸地域は津波被害を受けた状態がそのまま残り、双葉駅周辺の地区でも被災家屋の解体や修繕が進んでいないことを見て、とても重い気分になり、間接的ながら職員・町民の皆さんのご心労が想像できた。中間貯蔵施設の予定地は、実際に近くを通ってみて広大さを実感したと同時に、県内各地から運び込まれるであろう廃棄物の量や、運搬車両が頻りに往来するリスクを感じざるを得ず、原発事故の重大さと廃炉までの長い道のりを忘れずに、今後も福島に関わり続けていきたいと思う。

(2) 被災の現状と復興への課題をお聞きして（事実・感じたこと）

町の大部分が帰還困難区域であること、町役場の近くまで中間貯蔵施設の予定地になっていることで、復興計画の難しさがあると思う。それでも町民の意見を聞き取りながら、現実的で具体的な方策を目指されていることがよくわかった。国や省庁への要望も、粘り強くどんどん出していくのがいいと思う。

(3) 復興公営住宅予定地を視察して（事実・感じたこと）

比較的落ち着いた土地柄に見え、ここなら安心して暮らせるのではと感じられた。大規模な団地として、「仮の町」とまではいかなくとも、コミュニティの維持、形成に寄与するのではないかと思う。来客用の宿泊スペースもできるようなお話があったと記憶しているが、それもいいことだと思う。双葉町内で整備が進んで業務や居住ができるようになるまでには数年～十年かかるため、それまで町民の皆さんの拠り所になる場所（復興住宅の集会所や町役場、他県での交流スペースなど？）で、それぞれのスタンスで自由に行き来できる状況になるといいと思う。

**(4) いわき・まごころ双葉会と交流・お話を伺って（事実・感じたこと）**

岡田会長のご挨拶から、避難を余儀なくされたことへの悔しさが伝わる中で、「ふるさは心の中にある」という言葉に、強い思いと信念を感じた。どの方も、言葉には出さなくてもふるさとへの思いは消えていないのだと思う。

双葉町民の皆さんが自治会を作って集まることで思いを共有できていいのではと単純に思っていたが、逆に周囲のいわき市民から冷ややかな視線を浴びないように神経を使われているのだと知った。また、集まるための場所を借りるのが難しいなど、ちょっとしたことで「市民ではない」ことの壁に直面されている様子が窺えた。いわき市で住宅を購入された方も、進んで地区の草刈りをするなど交流に努めているとのことだった。

無理解・無関心から生まれがちなそうした壁が少しでも低くなるように、今後も町や団体としても努力が必要だと思う。そういった面で外からの中間支援なども役立つ余地があるのではないかと、考えてみたい。

(5) 参加して（個人全体所感、神奈川に向けて）

今回の視察研修で訪れるまで、双葉町の現状について知らないことが多かった。何と言っても、自由に出入り可能な避難指示解除区域が（割合として）少ないのが大きな足かせになっていると思う。

普段から相双地域に関する報道記事のチェックや情報収集はしているつもりだが、それでも伝わってこないことが多いと感じた。

部外者としてできることは限られているが、まずは関心を持ち続け、世間一般の無理解・無関心に少しでも抵抗できればと思う。また、避難生活を送られている方々に対して、寄りそう気持ちを示し続けたいと思う。

(6) 双葉町様へ（町長、町役場、町民の皆様へ）

県外のボランティア団体である私たちを快く受け入れ、率直なお話を聞かせていただいたことには本当に感謝しています。ご同行いただいた双葉町職員のお二人はもちろんですが、お忙しい中で町長にもご挨拶にお立ち寄りいただいたことは、町への真摯な思いと姿勢そのものだと感じました。神奈川県に避難されている方々にもお伝えしたいと思います。

いわき・まごころ双葉会の皆様にも、このためにわざわざお集まりいただきありがとうございました。短い時間でしたが直接お話を伺える貴重な機会となりました。今後もご縁を持ち続けられたらと願っています。

(補足)

1. 視察研修便参加者アンケート集計 < () 内は回収・回答数です >

(1) 参加のきっかけ

- a (10) 福島でボランティアをしたかった
- c (07) 日程や行程がよかったから
- e (09) その他
 - ・娘から今回の研修があるけど一緒に参加してみないということを知り、現状の双葉町の事を知れると思い参加いたしました。
 - ・福島の現状を知りたいと考えたから
 - ・他団体で双葉町だるま市に手伝いをした事から双葉町に関心を持った。
 - ・個人的に行くよりも、皆様の交流を基に、より多用で人々の交流ができる。
 - ・双葉町に関心があった。
 - ・双葉町の現状と将来計画について知りたかった。
 - ・復興計画を行政の方からお聞きできるから。
 - ・双葉町の現状を知りたかったから。
 - ・双葉町の現状を知るため。

(2) 出発前の kfop からの案内

- a (19) ちょうどよかった
- c () 多すぎた

(3) 今回の活動（視察研修）はいかがでしたか

- a (16) 非常に満足
- b (04) 満足
 - ・懇親会は飲みづらい雰囲気だった。

⇒そうですね。今回オン・オフの切り替えが中途半端でした。次回はメリハリを付けます。

(4) 活動（視察研修、全般）時間について

- a (06) 今回と同じでよい
- c (04) その他
 - ・初めてのことでいつものボランティア活動の事が良くわかりませんが、今回とても良かったと思っています。
 - ・あさ、横浜・東京どちらからでも乗れるのが良かった。
 - ・活動はしていないが、時間については今回のでよい。
 - ・宿泊便としてはちょうど良い。

⇒ありがとうございます。

(5) これからも参加したいですか

- a (17) 参加したい

(6) 活動（視察研修、全般）についてのご感想・ご意見・伝えたいこと

- ・目的に沿ったプログラムだと思いました。目的の②「現状とこれから」を被災された方々、行政の立場の姿、住民の立場での姿、特に行政の現状と姿勢、胸打たれました。
- ・2日間の研修内容、そして日程や調整など、ご準備いただき大変感謝いたします。とても中身の濃い、そして双葉町の現状が良く理解できる研修でした。特に、行政のお立場と被災された、それぞれのお立場の思いをお聞きできたことは、改めてこの状況に置かれている方々のご苦労を理解する貴重な機会だったと思います。
- ・初めての視察便でした。一番良かったのは、双葉町の方のお話を聞くことができたことです。作業中心の活動とは違った形ですが、大切な活動だと思いました。
- ・双葉町職員のお2人がとても明るいお人柄だったので、楽しい雰囲気の研修になったと思います。
- ・震災後、地道に活動を続けてこられている事にまず感心しました（ボランティア活動に関して娘から色々聞いていたので）。続けてきたことによって地元の方々との信頼関係も見させて頂き、済んでいる場所等に関わらず地域を超えての交流の素晴らしさに考えさせられました。
- ・原発の近くまで行かれて、見る事ができて良かった。行政の考え方と、避難されている方の生の声が聞けて良かった。
- ・双葉町の武内様、橋本様のアテンドに篤く感謝します。お二方の仕事・熱意には感動するばかりです。これから困難は増えますが、双葉町の復興に向けて意気込みを自分も勉強させていただきました。
- ・現地を見て、かつ行政の方の案内があつて、現地の状況を具体的なイメージを持つことができました。ほんとうに有意義な視察でした。
- ・双葉町の今が知れて良かった。
- ・ありがとうございました。
- ・次回研修も期待しています。
- ・復興住宅などに移動された後のことなど、これからも問題が続き、神奈川からできる事を少しでも何かにつなげたいと。
- ・双葉町の方々と短い時間でしたがお話をし、いわきで生活している現状を知ることができました。参加したからわかることがあるので、これから先も参加して行きたいと思います。

⇒参加のみなさん、双葉町様のことをみなさんの目、耳、体で感じていただいたようです。

双葉町様の視察研修便を実施し、意味があったと感じます。

双葉町長、双葉町職員の皆様、双葉会の皆様、ありがとうございました。

(7) kfop の今後の活動（全般）に期待すること

- ・次回の視察に参加したいと思いました。
- ・これからもぜひ研修活動もつづけて頂きたいと思います。
- ・視察研修便は今後も続けられたらいいと思う。
- ・兵庫県からの遠い応援となりますが、kfop 活動に目を向けていきたいです。初めての私も本当に心良く受け入れて下さった皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

- ・福島行きを継続しましょう。スタッフの皆様ご苦労様でした。ありがとうございました。
 - ・定常的な活動と今回のような研修活動を続けて、福島の復興に少しでも役立つこと。
 - ・これからも視察便には参加したいと思っています。
 - ・毎月のボラバスを期待しています。
 - ・今まで続けてきた活動をこれからも続けてほしいです。毎回はムリですが参加できる時もありますので…。
- ⇒今後ともできることを続けていきます。

(8) アンケートご回答者

- ・性別：女性(9) 男性(10)
- ・年代：20代() 30代(2) 40代(3) 50代(9) 60代(4) 70代(1)
- ・職業：会社員(10) 自営業(1) パート他(1) 家事専業(1) 定年(2) その他(3)
- ・被災地ボランティア経験：
初めて(2) 2～3回() 4～5回(1) 6～9回(1) 10回以上(14)

2. 会計

【 全体予算（実績） 】

(2016.7.24 現在)

収入				支出			
項目	金額	個数	合計	項目	金額	個数	合計
参加費 A	18,500	22	407,000	旅費交通費	407,895	1	407,895
参加費 B	500	21	10,500	通信費	820	1	820
参加費 C	8,960	1	8,960	印刷費	2,656	1	2,656
(全額参加者負担)				会議費	630	1	630
				雑費	15,781	1	15,781
				振込手数料	918	1	918
合計			426,460	合計			428,700
			@19,400 円程	収支			▲2,240

※費用は全額参加者の自己負担です。

※参加費 A は旅費交通費の参加者按分費用

※参加費 B は弁当代

※参加費 C は懇親会等雑費分

※旅費交通費には、バス代、高速代、保険料、弁当代、宿泊代を合算しています。

※支出で最終報告書の印刷代、郵送代等は未計上（完了後に計上）です。

※不足分は参加者寄付等を充当させていただきます。

以上



保護用紙